

はか
博 多 128

－博多遺跡群第170次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1040集

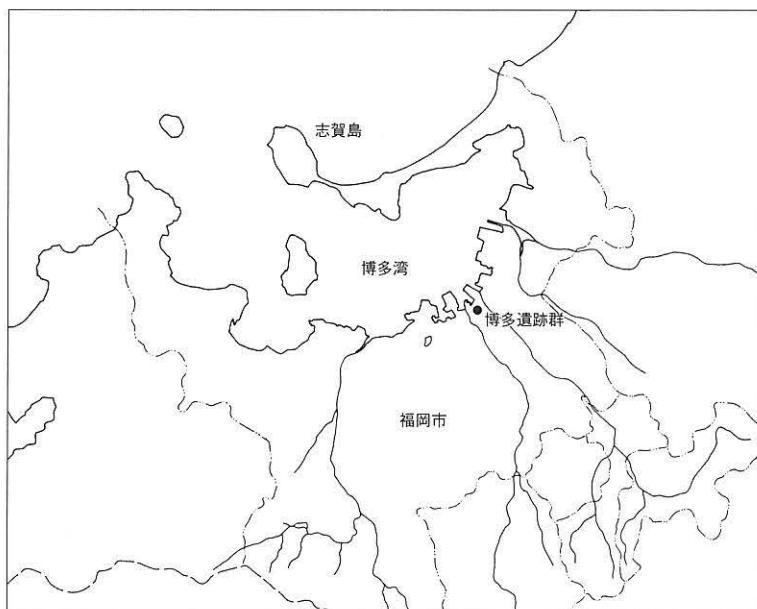
2009

福岡市教育委員会

はか
た
博 多 128

－博多遺跡群第170次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1040集



調査番号 0667
遺跡略号 HKT-170

2009

福岡市教育委員会

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、共同住宅の建設に先立って実施した博多遺跡群第170次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、古墳時代の初めの竪穴住居跡や土壙などが発見されました。殊に古墳時代の竪穴住居跡は、博多濱における弥生時代から古墳時代にかけての集落域の拡がりを解明する上で貴重な資料となるものです。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、考古学や地域史の研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

れいげん

1. 本書は、福岡市教育委員会がアルテ建物有限会社の共同住宅建設に先立って、2007(平成19)年2月13日～4月24日の間に福岡市博多区祇園町76番2において発掘調査した博多遺跡群第170次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、竪穴住居跡をSC、土壙をSK、井戸跡をSE、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通番して001から始まる3桁のNo.を付し表示した。
4. 本書に掲載した挿図は遺構を小林義彦が、遺物は小林と今村ひろ子が作成した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林と今村が作成した。
6. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
7. 本書の執筆・編集は小林が行った。
8. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序

I.	はじめに	1
1.	発掘調査にいたるまで	1
2.	発掘調査の組織	1
3.	立地と歴史的環境	4
II.	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	基本的層序	9
3.	第1・2面の調査	9
1)	土 壤	10
2)	井戸跡	14
4.	第3面の調査	15
1)	竪穴住居跡	15
2)	土 壤	16
3)	その他の遺構	17
5.	包含層出土の遺物	19
III.	おわりに	28

挿図・表目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000).....	2	Fig.23	2・3号井戸跡出土遺物実測図 (1/3)....	15
Fig. 2	博多遺跡群第170次調査区位置図 (1/4,000)...	3	Fig.24	15・16号住居跡実測図 (1/40).....	16
Fig. 3	第170次調査区位置図 (1/1,000).....	5	Fig.25	15・16号住居跡全景 (西より).....	17
Fig. 4	第170次調査区周辺現況図 (1/500).....	6	Fig.26	15・16号住居跡出土遺物実測図 (1/3)....	17
Fig. 5	遺構配置図 (1/150).....	7	Fig.27	15号住居跡出土遺物 (縮尺不同).....	17
Fig. 6	調査区全景 (西より).....	8	Fig.28	21号土壙全景 (北より).....	18
Fig. 7	調査区全景 (南東より).....	8	Fig.29	21号土壙獸骨出土状況 (東より).....	18
Fig. 8	1号土壙実測図 (1/30).....	9	Fig.30	ピット出土遺物実測図 (1/3).....	19
Fig. 9	1号土壙遺物出土状況 (南東より).....	9	Fig.31	ピット出土遺物 (縮尺不同).....	19
Fig.10	4号土壙実測図 (1/30).....	10	Fig.32	出土銅錢 (縮尺不同).....	19
Fig.11	4号土壙遺物出土状況 (南より).....	10	Fig.33	包含層出土遺物実測図1 (1/3).....	20
Fig.12	4号土壙遺物実測図 (1/3).....	11	Fig.34	包含層出土遺物実測図2 (1/3・1/4)....	21
Fig.13	4号土壙出土遺物 (縮尺不同).....	11	Fig.35	包含層出土遺物実測図3 (1/8).....	22
Fig.14	10号土壙実測図 (1/30).....	12	Fig.36	包含層出土遺物1 (縮尺不同).....	23
Fig.15	10号土壙全景 (東より).....	12	Fig.37	包含層出土遺物2 (縮尺不同).....	24
Fig.16	10号土壙出土遺物実測図 (1/3).....	12	Fig.38	整地層上層出土遺物実測図 (1/3).....	25
Fig.17	10号土壙出土遺物 (縮尺不同).....	12	Fig.39	整地層上層出土遺物 (縮尺不同).....	25
Fig.18	25号土壙実測図 (1/30).....	13	Fig.40	整地層下層出土遺物実測図 (1/3).....	26
Fig.19	25号土壙全景 (西より).....	13	Fig.41	整地層下層出土遺物 (縮尺不同).....	26
Fig.20	25号土壙出土遺物実測図 (1/3).....	14	Fig.42	東側搅乱壙出土遺物実測図 (1/3).....	27
Fig.21	25号土壙出土遺物 (縮尺不同).....	14	Fig.43	東側搅乱壙出土遺物 (縮尺不同).....	27
Fig.22	2・3号井戸跡実測図 (1/80).....	14	Tab. 1	出土銅錢一覧表.....	28

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

古代の昔から貿易都市として栄えた「博多」は、弥生時代より大陸文化の受け入れ口として長い歴史をもち、その町並みの下には幾層にも重なり合ったさまざまな遺構が眠っている。21世紀の今日、メイン道路に面した博多の町には大規模な商業施設やオフィスなどの高層ビルが建ち並んでいる。都市空間の有効活用を図った高層ビル化の傾向は、路地に面した旧市街地にも及んでいる。博多の町を東西に延びる国体道路と南北に延びる大博通りに面した祇園町界隈も例外ではなく、共同住宅の高層化が進み古い博多の家並みはビルの谷間に埋没しつつある。

2006（平成18）年2月2日、アルテ建物有限会社より共同住宅の建設に先立って、埋蔵文化財の事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された。この地は博多遺跡群の南西部に位置し、周辺域ではビル開発等に伴う発掘調査が複数の地点で実施されており、当該地にも遺構や遺物が濃密に拡がっていることが予想された。このため、同年3月7日に試掘調査を実施した結果、地表下2.2mで暗褐色砂質土の遺物包含層を確認したが、博多遺跡群通有の複数におよぶ遺構面は未確認のままであった。この共同住宅の建設は、既に施工業者に発注され、竣工日程も決定されていることから早急な発掘調査が必要となつた。

はじめに、鋼矢板の打設による周辺の土留め工事が先行して行われた。その終了を待って2006（平成18）年2月13日に瓦礫層の鋤き取りと搬出を行った後に発掘調査を開始した。発掘に伴う排土は、調査区の西側に仮置する予定であったが、狭地のため調査区の一部にも仮置きする必要に迫られた。そのため調査区の西側隅は遺構面の確認に留めた。この間、排土量の多さから施工にあたった清水建設の方々には2度排土の搬出を依頼して調査の進捗に協力していただいた。このように施主と工事関係者諸氏の多大な協力とご理解を得て4月24日に無事終了した。ここに記して謝意を表します。

2. 発掘調査の組織

調査委託 アルテ建物有限会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第1課

文化財部長 矢野三津夫 山崎純男（前任）

埋蔵文化財第1課長 山口譲治

埋蔵文化財第1課調査係長 米倉秀紀 山崎龍雄（前任）

調査庶務 文化財管理課 榎本芳治 古賀とも子 鈴木由喜（前任）

調査担当 埋蔵文化財第1課 小林義彦

調査・整理作業 石橋陽子 伊藤美伸 今村ひろ子 大瀬良清子 兼田ミヤ子 小島君子

坂梨美紀 知花繁代 塚本啓太 塚本よし子 常松みどり 土斐崎孝子 西田剛

西田文子 野田淳一 播磨博子 濱フミコ 福田操 松尾千寿 松下さゆり

三栗野明美 矢川みどり 山口慶子 森田ちはる 森田祐子

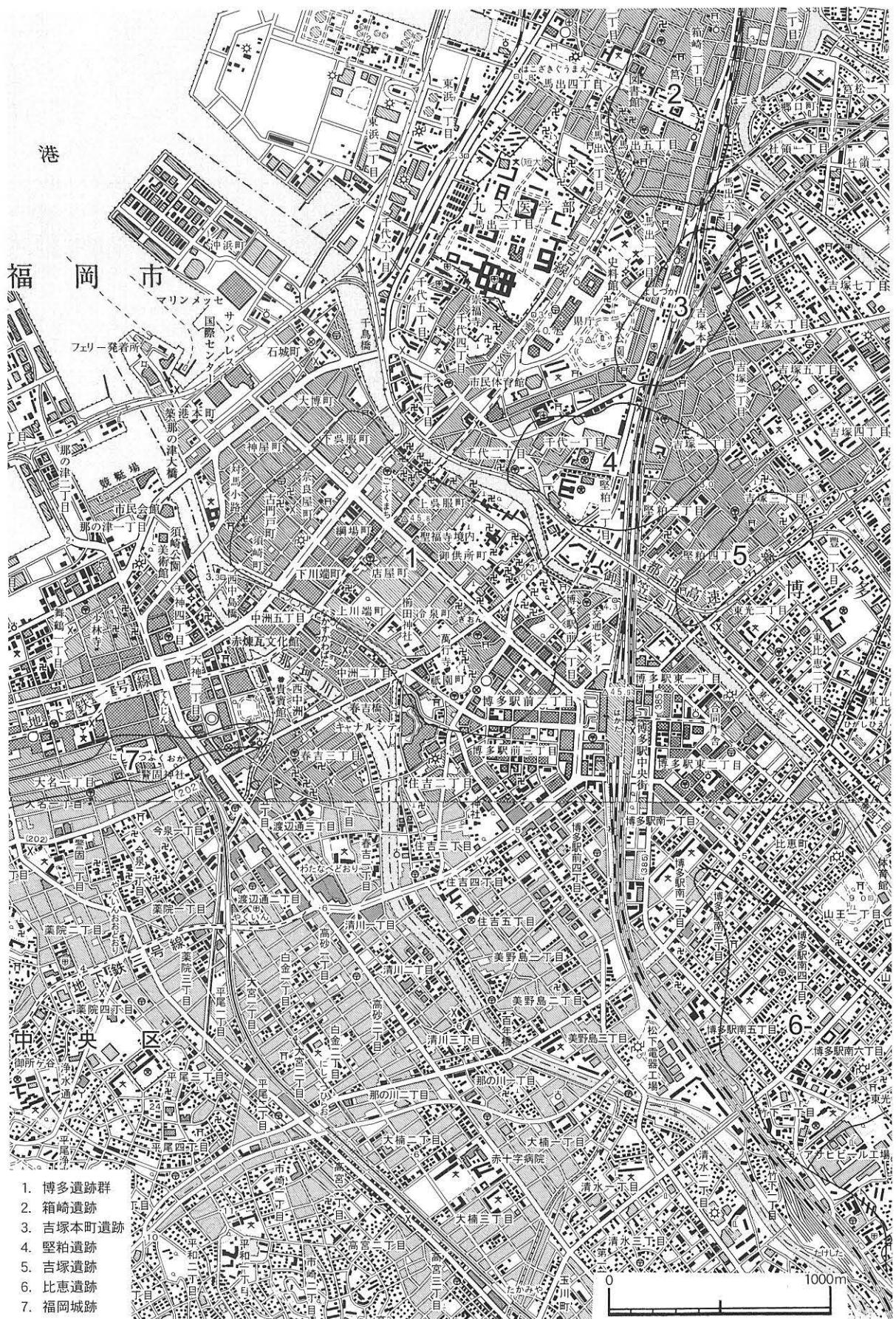


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

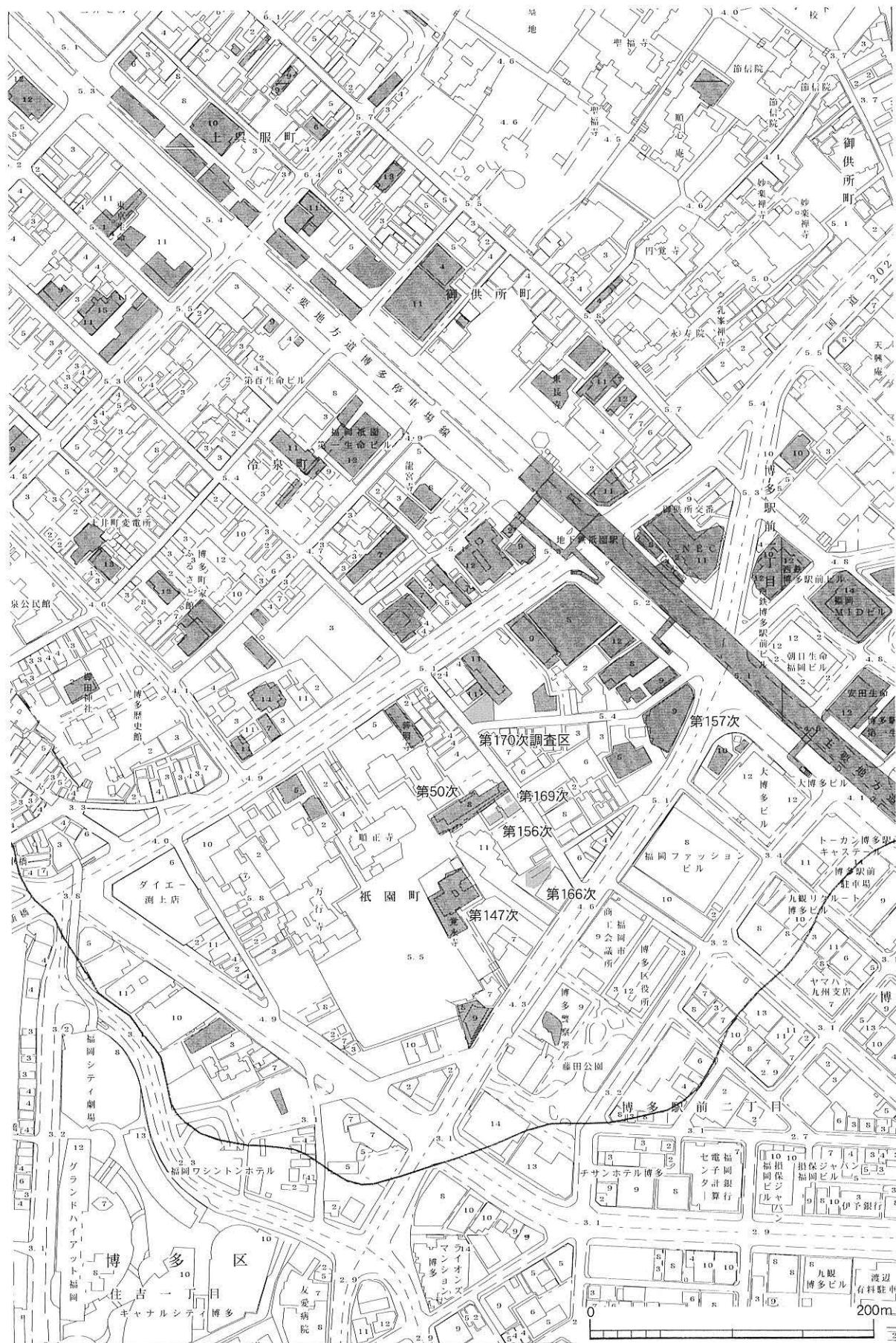


Fig. 2 博多遺跡群第170次調査区位置図 (1/4,000)

3. 立地と歴史的環境

博多湾にむかって開口する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれた沖積平野である。この福岡平野には、御笠川と那珂川の二筋の大きな流れが河口を接して博多湾に注いでいる。博多遺跡群は、この二つの河川に挟まれた博多湾岸沿いの古砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画される。

この博多湾に面した東西400m、南北1,000mの古砂丘上に占地する博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連綿とつづく大複合遺跡である。殊に、古代には中国や朝鮮半島からの陶磁器類の輸入窓口として、また中世には泉州堺と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の発掘調査は、1977（昭和52）年の高速鉄道祇園町工区の調査に始まり、これまで200地点に及ぶ発掘調査が行われ、二千年余に及ぶ歴史の全貌が次第に明らかになりつつある。

博多遺跡群を概観すると、その初見は弥生時代前期後半に遡る。はじめに祇園町交差点を中心とする古砂丘上に住居跡群や甕棺墓群が営まれる。ここは博多遺跡群を構成する二つの古砂丘のうち、陸側の「博多濱」のほぼ中央部で、古砂丘の最高所にあたり、中期から後期には東から南の後背地に向かって大きく拡がっていく。

次の古墳時代になると、砂丘の前進に伴って北の上呉服町周辺まで拡がっていくが、遺跡の中心はまだ「博多濱」の最高所にあり、竪穴住居跡や方形周溝墓などが調査されている。また、古砂丘東側の第28次調査区では、墳丘長が56mを超える5世紀初頭に造営された前方後円墳の「博多1号墳」が確認されており、那珂川右岸に展開する前方後円墳群の一翼として位置づけられる。

更に、「那の津」の官家が設置された536（宣化1）年以降、古代になると博多遺跡群は対外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は「博多濱」全域に亘って拡がっていく。688（朱雀3）年に初見する「筑紫館」、842（承和9）年以降に現れる「大宰府鴻臚館」は、博多遺跡群から入り海ひとつを隔てた丘陵上に位置している。博多遺跡群に官衙が置かれた記録はないが、鴻臚館式瓦や老司式瓦、皇朝十二銭、円面硯、石帶、墨書須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器のほかに越州窯系青磁、長沙窯系陶器などの多種多量の輸入陶磁器が出土し、官衙的色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。一方、909（延喜9）年の遣唐使の廃止は、私貿易の隆盛を促すこととなり、古代末からは対宋貿易の中心地となる。発掘調査で検出される遺構や遺物の多くは、11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には「博多濱」北限の潟が砂州状に埋め立てられ、呉服町交差点付近で北の「息の濱」と繋がる。

鎌倉時代には、「息濱」の開発が進み、「博多濱」と一体化して都市「博多」を形成する。13世紀後半から14世紀初めには砂丘上に幾筋もの道路が開削され、室町時代を通して供用されるが相互間の規則性や統一性は有していない。しかしながら、これらが中世後半期における都市「博多」の町並みの概観を示しているといえよう。一方で、「元寇の役」の後には鎮西探題府が置かれ、対外貿易都市としての機能のみならず西国の政治的中心地としての側面も備えてくる。

室町時代には、「息濱」が一層の発展を遂げ、博多の都市機能の中心は内陸側の「博多濱」から海側の「息濱」へと移る。息濱の商人たちは、朝鮮半島や中国大陆のみならず、遠く東南アジアにまで進出していく。このことはベトナムやタイ製の陶磁器の出土によって裏付けられる。また、博多にも和寇の記録があり、海賊である和寇によって民間貿易が担わっていた側面も窺える。一方、政治的には足利幕府によって九州探題が置かれたが、南朝方の反幕的勢力が強く、その政治力や軍事力は強大なものとはなり得なかった。



Fig. 3 第170次調査区位置図 (1/1,000)

第170次調査区のある祇園町界隈は、「博多濱」の中央部に位置し、これまでに30余ヶ所で発掘調査が実施されている。本調査区のすぐ東にある第32次調査区や175次調査区では、弥生時代中期初めの甕棺墓群が、また南西へ80mの第147次調査区では前期末の甕棺墓群が営まれており、「博多濱」の最高所を取り巻いて墓域が拡がっているものと考えられる。次の古墳時代前期には、この祇園町を中心にして多くの竪穴住居跡が発見され、集落域が「博多濱」の最高所を中心にして拡がっていたことが窺われる。しかし、後期にはやや稀薄になるが奈良時代になると再び集落域が濃密に拡がり、第33・45・50・59次調査区などで竪穴住居跡が検出されている。集落域は、古墳時代前期よりも拡大し、砂丘の谷部の整地層上にも居住域は拡がっている。その後、平安時代後期（11世紀後半）～鎌倉時代（13世紀後半）には「博多」の街が北へむかって延びていくとは言いながら都市の中核が、依然としてこの「博多濱」を中心にして拡がっているために各調査区でこの期の遺構や遺物が重層的に濃密に拡がっている。すぐ南東の第50次調査や第147次調査および南に位置している第156・165・169次調査の成果もこれを示唆している。



Fig. 4 第170次調査区周辺現況図 (1/500)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

第170次調査区は、博多遺跡群を形成するふたつの古砂丘のうち陸側にある「博多濱」の南部に位置する。170次調査区のある祇園町中編は、「博多濱」の頂部に立地し、「博多濱」はここから遺跡群の南縁を画す旧比恵川（後の房州堀）にむかって緩やかに傾斜をはじめる。

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの長きにわたって人々がその営みを刻み込んできた大複合遺跡で、基盤層の黄白色砂層までの間には1～5mにもおよぶ遺物包含層が堆積している。この遺物包含層には幾面もの遺構面が重層的に観察されるが、基盤層上に堆積した茶褐色砂層を除いて堆積土壤の変化は明確ではない。仮に良好な整地層が確認されても面的な拡がりとしてはほとんど捉えがたいのが現実で、厳密に单一時期の遺構面を検出することは困難である。大戦時の焼灰層を含む近代の搅乱層を取り除くと稀に近世の遺構面があるが、一般的には中世の遺構面が検出される。このため発掘調査では、はじめに搅乱層を取り除いた上で安定した面まで恣意的に掘り下げて遺構面を調査し、その後、さらに包含層を掘り下げて下層の安定した遺構面を検出すると云う方法をとった。第170次調査区では3面の遺構面を検出し、上層から第1面、第2面とし黄白色の基盤砂層上に掘り込まれた遺構面を第3面とした。ただし、調査区の中央部には深い壕状の廃棄壙があり、その埋土上に井戸や土壙などの遺構が掘り込まれていた。そのため古砂丘を形成する黄白色砂層は、調査区の南東隅の狭小な範囲にしか残っておらず、第2面と第3面の遺構は土壙や竪穴住居跡をわずかに検出したに過ぎない。一方、調査区の大半を占める壕状の廃棄壙上には幾層かの包含層があり、遺構面の存在が想起されたが明確な面としては捉えられなかった。

このような条件下で発掘調査に着手したが、調査区の狭小さから調査区内の西部を排土置き場としたために予定地の25%ほどは調査できなかつた。また、排土量の多さから調査区外への排土の搬出を余儀なくされ、2度にわたって施工業者である清水建設（株）の協力を得た。結果的に、基盤層下にまで廃棄壙の整地層が及び第1面と第3面の遺構を同時進行的に調査することに多くの時間を要しながら、第1面では井戸跡や近世墓を検出するに留まつた。更に、排土置き場の確保のために調査区の一部が未調査のままに終わったことは、狭い地域での調査の在り方を再検討する端緒となろう。

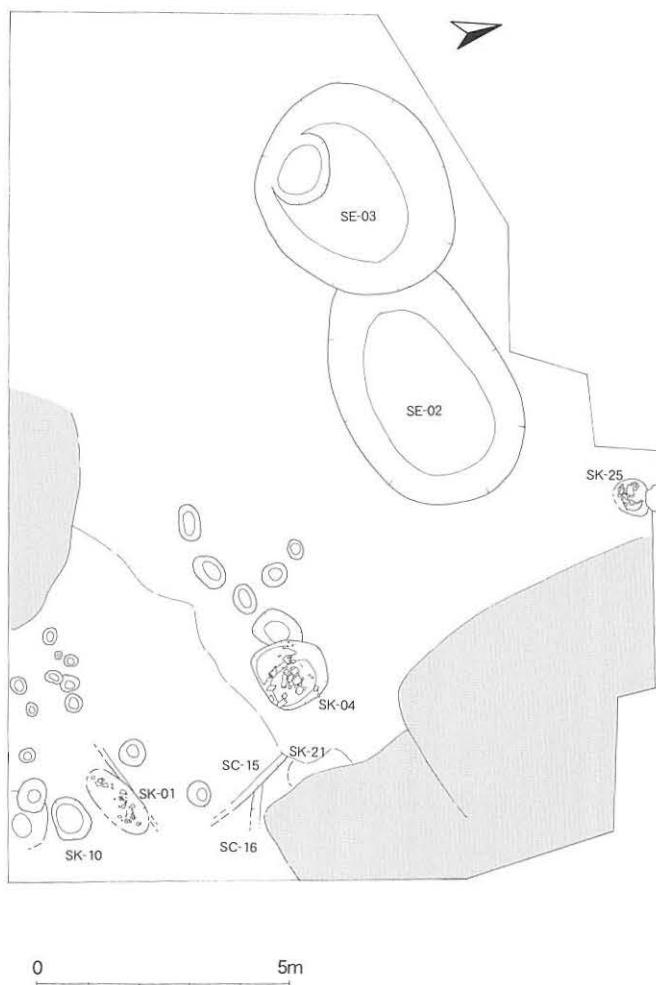


Fig. 5 遺構配置図 (1/150)



Fig. 6 調査区全景（西より）



Fig. 7 調査区全景（南東より）

2. 基本的層序

第170次調査区は、博多遺跡群を形成する陸側の古砂丘上に立地しており、砂丘上面の風成砂層の黄白色砂を基盤層（地山面）としている。この淡黄白色砂層上に幾層もの人工的堆積層（遺物包含層）が厚く積もり、その中に弥生時代以降の各時代の生活面が掘り込まれている。黄白色砂の基盤層は標高3.8～3.9mで検出した。この基盤層上には弥生時代～奈良時代の土器片を包蔵する濃茶褐色砂層が10～20cmの厚さで堆積している。更にその上面には灰茶～暗褐色砂土層の整地層が厚く堆積しており、その層中に中世から近世の遺構面があるが、明確な遺構面としては区分できなかった。

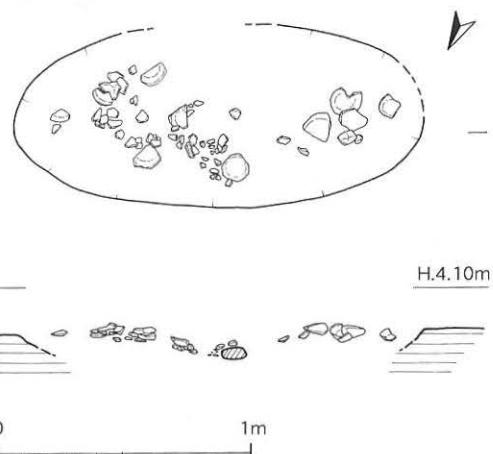


Fig. 8 1号土壌実測図 (1/30)

3. 第1・2面の調査

第1面は、標高4.2～4.3mで検出した遺構面である。このレヴェルで近世の埋甕土壌を検出し、調査区の中央部に拡がる廃棄壙もこの面の上層から掘り込まれている。この廃棄壙上には厚い整地層が定積しており、幾層かに分層が可能であるが、明確な遺構面としては捉えることができなかった。一方で、東部には標高3.8～3.9mのレヴェルで古砂丘がわずかに残っている。この古砂丘上の灰茶褐色砂土中には土師器壊などが出土する土壌があり、この遺構面を第2面とした。しかしながら、整地層上の遺構面の調査は、面的にレヴェルを揃えて遺構の検出を行ったため、古砂丘の残る東部では第2面を、また廃棄壙上の整地層では第1面の遺構を同時に調査することになった。そのため結果的には面的な遺構の把握に混乱が生じた。



Fig. 9 1号土壌遺物出土状況 (南東より)

1) 土壙 (SK)

土壙は2面を合わせて10基+αを検出した。しかしながら、2面の調査を同時進行的に行つたためにプラン的に把握しえなかつた不整形なものを含めるとその数は更に増えることが考えられる。プラン的には、方形～長方形のものと円形～橢円形プランのものとに大別されるが、その違いが意味するところは明らかではない。分布的には、調査区が狭小なため明らかでなく、周辺の調査を含めて考えることが必要である。

1号土壙 SK-01 (Fig. 8・9)

1号土壙は調査区の南東隅に位置する土壙で、すぐ南には10号土壙がある。土壙は、遺構上面で土師器坏や白磁片がまとまって出土した。しかし、掘り込まれた整地層と覆土に相違が少なくプラン的に不明な箇所がある。平面形は、長辺が165cm、短辺が75cmの長橢円形プランをなそう。遺物は、土師器坏や小皿のほか須恵器片、白磁碗、瓦片が出土した。

4号土壙 SK-04 (Fig. 10~13・32)

調査区中央部の廃棄壙下の古砂丘面で検出した土壙で、平面形は長辺が145cm、短辺が145cmの不整な円形プランをなしている。壁面はやや急峻に立ち上がり、壙底は浅い凹レンズ状をなすが、東側には半月形のフラット面が付く2段掘りの構造をなしている。検出面で陶器片口鉢や三耳壺のほか土師器坏や小皿、白磁碗等が出土した。覆土は粘質を帶びた濃灰褐色砂土で、状況的に第1面に掘り込

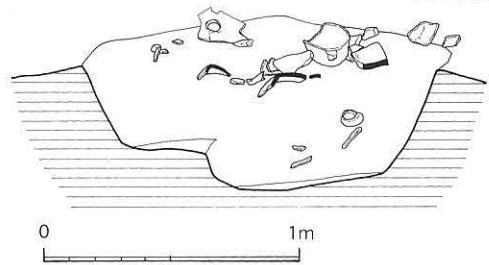
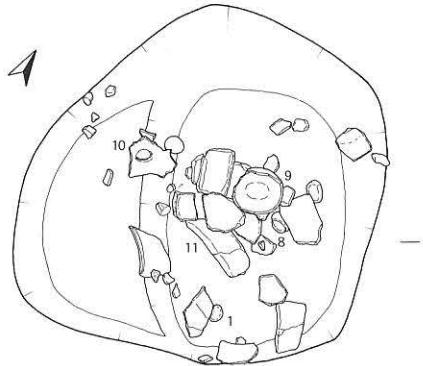


Fig.10 4号土壙実測図 (1/30)



Fig.11 4号土壙遺物出土状況 (南より)

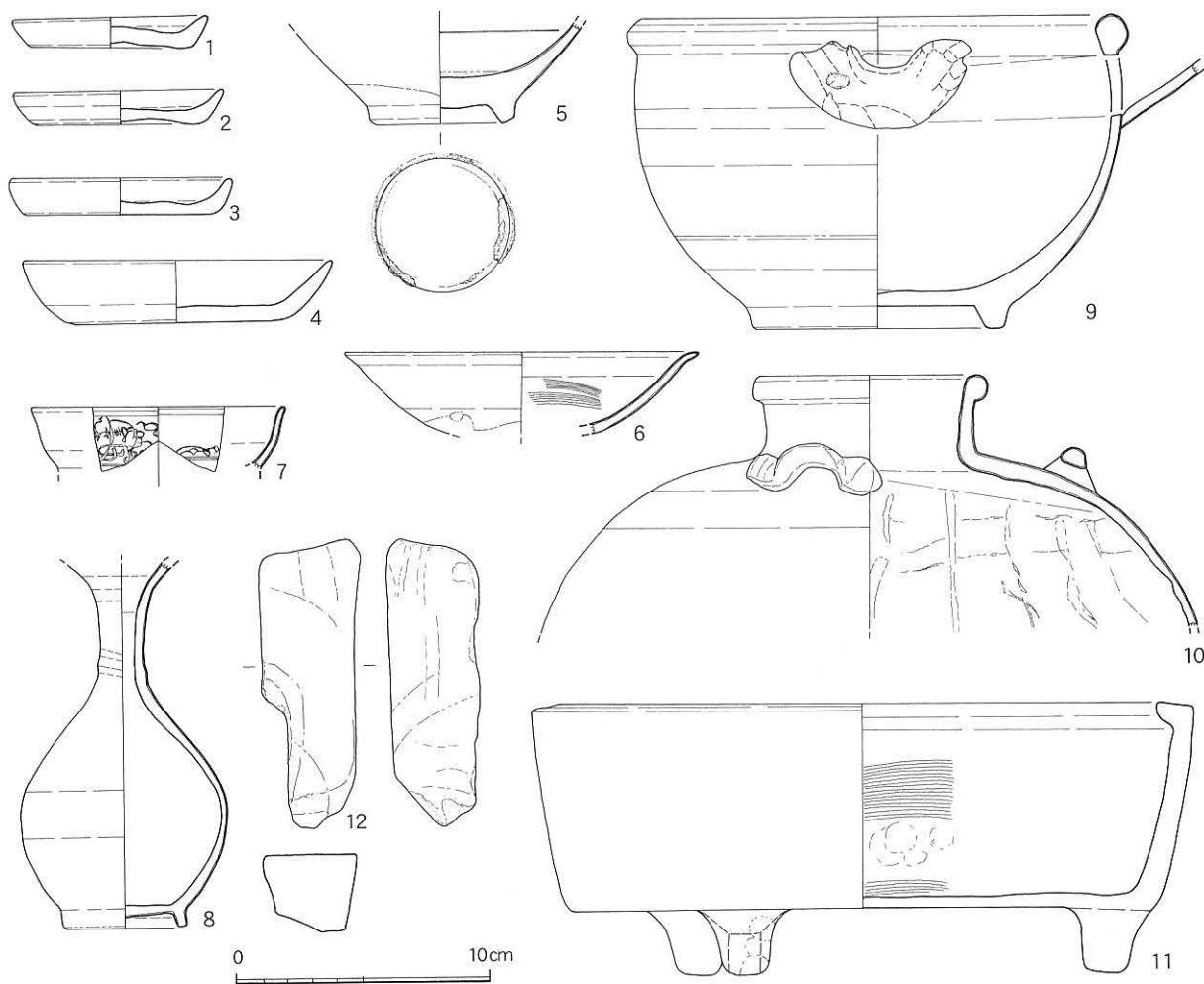


Fig. 12 4号土壤遺物実測図 (1/3)

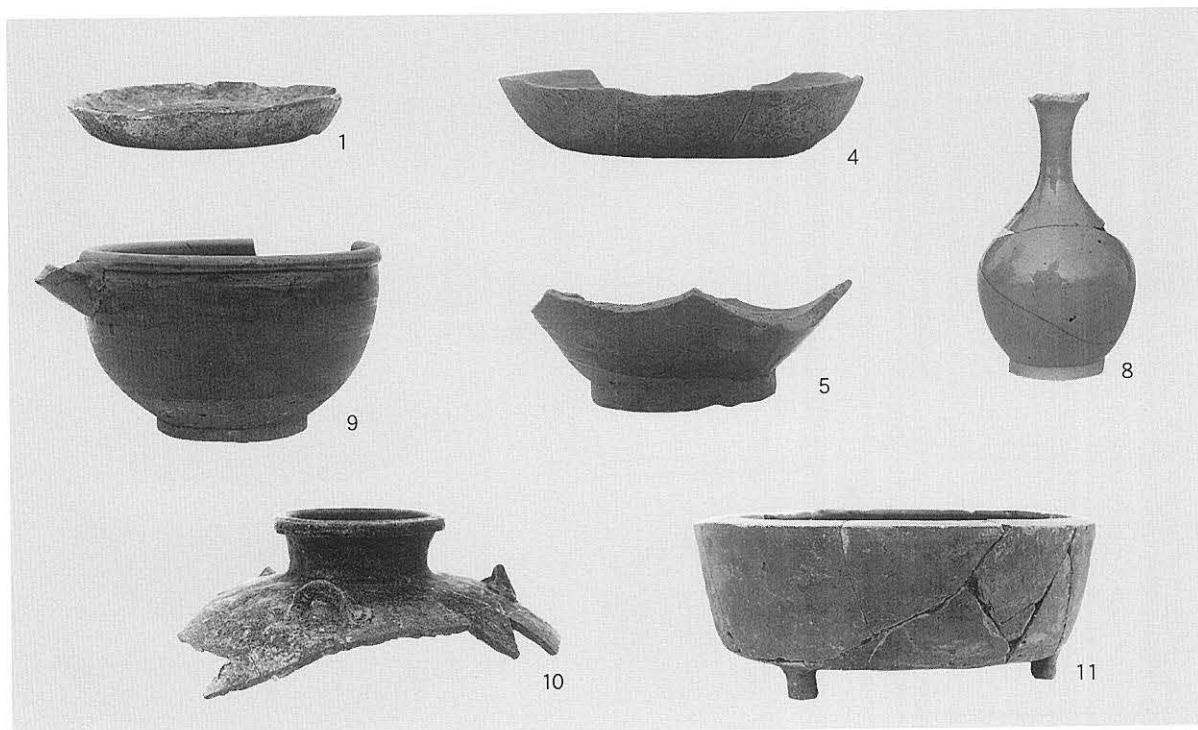


Fig. 13 4号土壤出土遺物 (縮尺不同)

まれた井戸跡の可能性が考えられる。

1～3は、口径が7.8～9cmの土師器小皿で、口縁部は短く外反する。底部は糸切り。1には油煙の付着痕があり、灯明皿への転用品。4は、口径が12.7cm、底径が9cm、器高が2.6cmの土師器壺である。口縁部は小さく膨らんで外反し、底部は糸切り。5は、底径が5.6cmの高麗青磁碗である。内面に細い圈線が巡り、見込と畳付には目跡が残る。黒色微粒と微細砂を含む灰白色の胎土にオリーブ灰の釉薬を薄く掛けている。6は、口径が14.2cmの同安窯系の白磁碗である。見込には1条の圈線と櫛描文で施文している。7は、口剥げの青花皿で、口径は10.2cm。外面には宝相華唐草文を施文する。8は、肥前の白磁壺。口縁部は、細く締まった頸部から大きくラッパ状に外反する。畳付には釉剥ぎの目砂が付着している。白色の緻密な胎土に透明釉を掛けている。17世紀後半の産。9は、肥前陶器の鉄釉片口鉢で口径は20cm、器高は12.2cm。17世紀

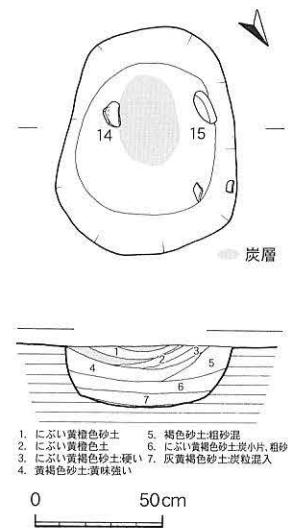


Fig.14 10号土壤実測図（1/30）

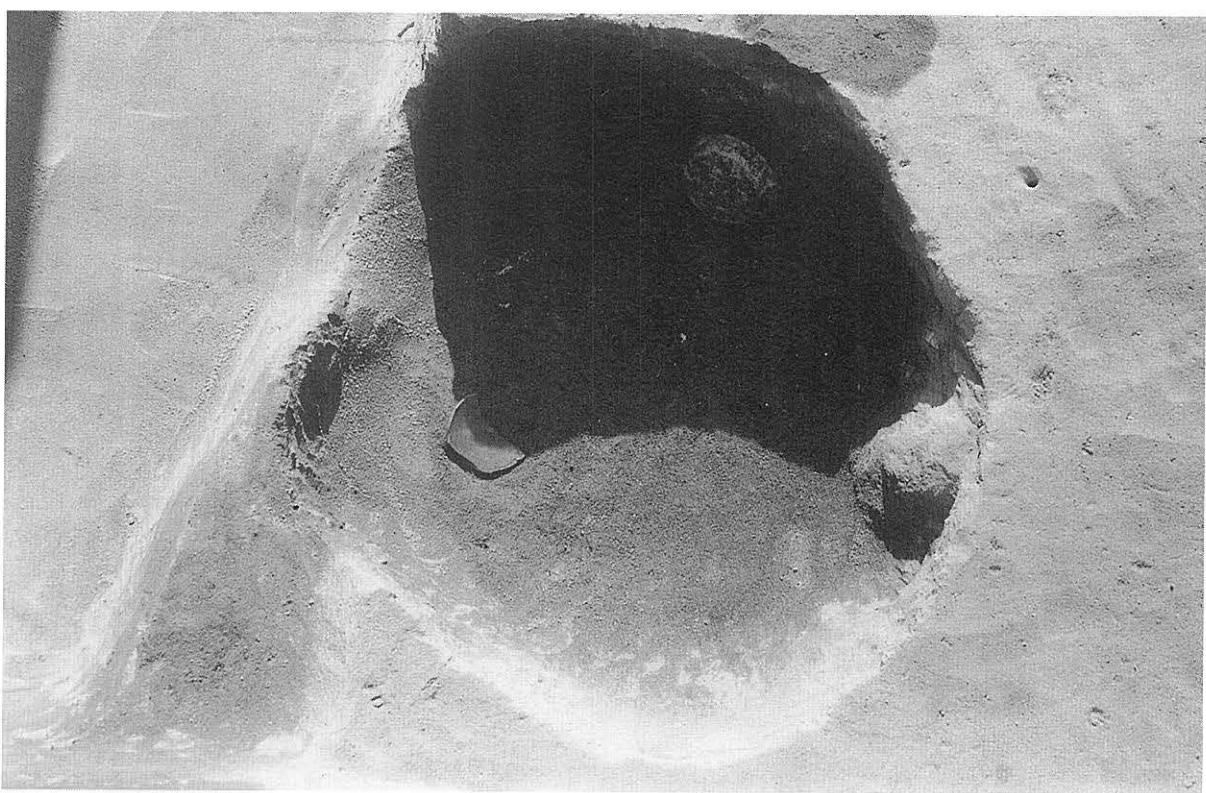


Fig.15 10号土壤全景（東より）

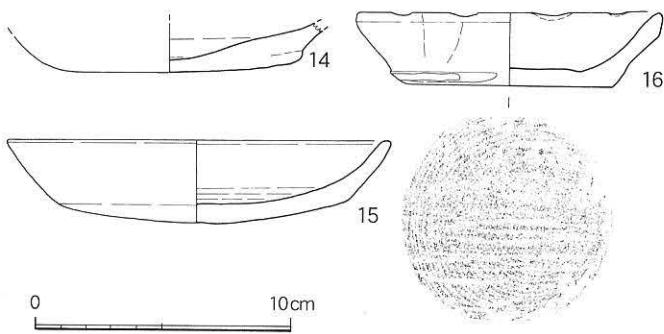


Fig.16 10号土壤出土遺物実測図（1/3）

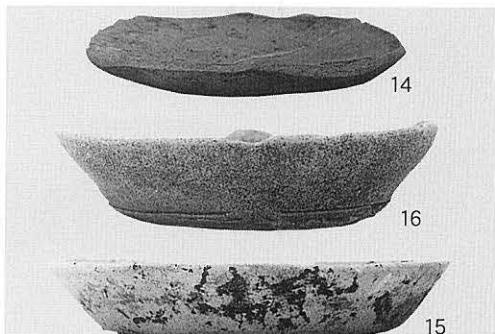


Fig.17 10号土壤出土遺物（縮尺不同）

前半。10は、口径が9.4cmの褐釉三耳壺で、内面には当具痕が残っている。灰ベージュ～黄橙色の薄胎に茶褐色釉を掛けている。11は、三脚の瓦質火舎で、口径は35.4cm、器高は14.5cm。体部はストレートに立ち上がり、内唇は逆L字状に強く張り出す。12は、砂岩質の砥石。13は、寛永通寶。

10号土壙 SK-10 (Fig. 14~17)

調査区の南東隅にある焼土壙で、1号土壙のすぐ南に位置している。平面形は、長辺が90cm、短辺が55~75cmの不整な楕円形プランを呈する。深さが26cmの壁面は、やや急峻に立ち上がり、壙底は浅い凹レンズ状をなしている。壙底と検出面に炭層が堆積していた。遺物は、土師器壊や甕、小皿のほかに須恵器甕、壊、壊蓋、瓦器碗等が出土した。

14~16は、土師器壊である。14は、底径が10.4cmで外底面は凸レンズ状に丸く膨らむ。油煙痕が付着している。15は、口径が15.4cm、器高は3.3cm。体部は内彎気味に立ち上がり、ヘラ切りの底部は凸レンズ状に丸く膨らむ。16は、口径が12.2cm、底径8.2cm、器高は3cm。短くストレートに外反する口縁部は、端部が厚く上方に摘み上げている。底部は糸切り後に板目圧痕。油煙が付着し、灯明皿への転用品。いずれも胎土は良質で微細～小砂粒を含み、淡黄～明黄橙色。

25号土壙 SK-25 (Fig. 18~21)

25号土壙は、調査区の北部に位置する土壙で、壙内に大型の瓦質甕を埋置した近世の甕棺墓である。甕は底部を残して大半が鋼矢板の打設により破壊されているが、棺内からは銅製に引手金具や煙管等が出土した。

17は、底径が40cmを測る瓦質の大型甕である。器壁は厚く、底部は上げ底である。調整は外面がナ

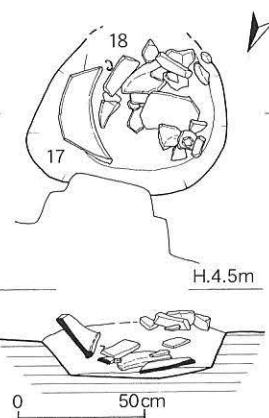


Fig.18 25号土壙実測図 (1/30)

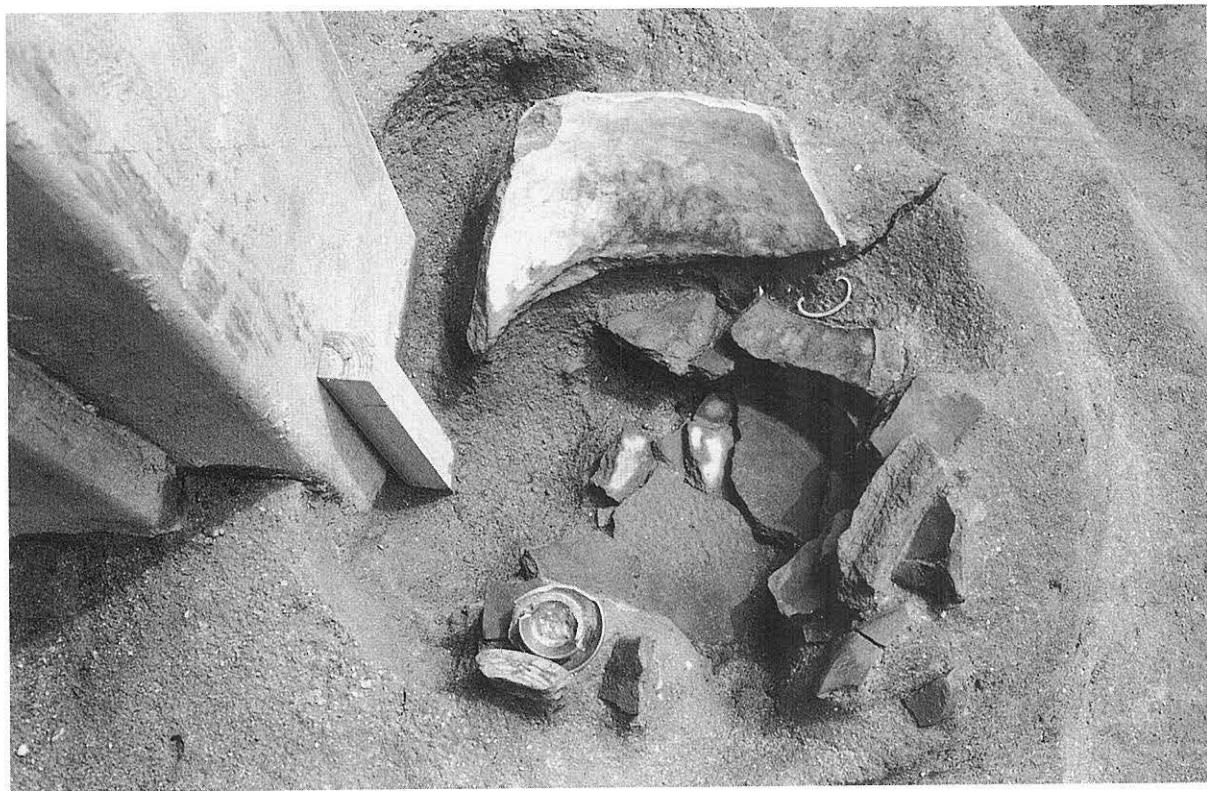


Fig.19 25号土壙全景 (西より)

デ、内面は押圧ナデ。胎土は良質で、小～中砂粒と雲母を含み、焼成は良好。灰黒色。18は、銅製の引手金具。19は、銅製煙管の吸い口。20は、細い銅製の釘。

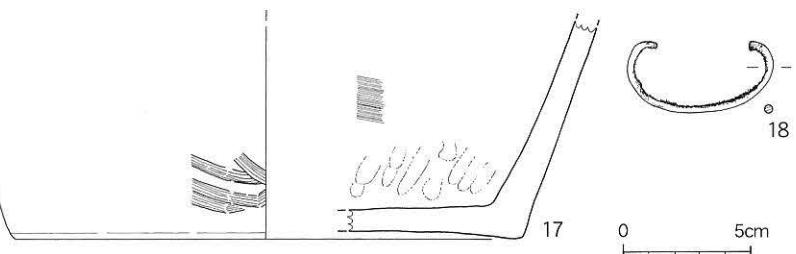


Fig.20 25号土壌出土遺物実測図 (1/3)

2) 井戸跡 (SE)

第1・2面の井戸跡は2基を検出したが、土壌の中にはレヴェル的に深いものがあり、井戸跡の可能性を含んだものもある。構造的には素堀りのもので、壌底に腐蝕した薄板片が遺存しているものがあり、井側に曲げ物を転用した可能性も否定できない。また、その構造や出土遺物から第2面の井戸跡と考えられる。

2号井戸 SE-02 (Fig. 22・23)

調査区の中央部北端にある素堀りの井戸で、掘方は長辺が270cmの楕円形プランを呈し、短辺は220cmほどになろう。検出面から1mで径が80～85cmの円形プランの井側を検出した。この井側を80cm掘り下げたところで薄板片を確認したが壁面が崩落した。井側は曲げ物と推考される。

21は口径が8cm、器高が1.4cmの土師器小皿。体部は内彎気味に立ち上がり、底部は糸切り。22は口径が14.4cm、器高が3.8cmの土師器坏。口縁部はストレートに外反する。胎土は良質で、微細砂粒を含み、色調は淡黄～黄橙色。23は龍泉窯I類の青磁皿で、口径は12cm、底径4cm、器高は2.3cm。見

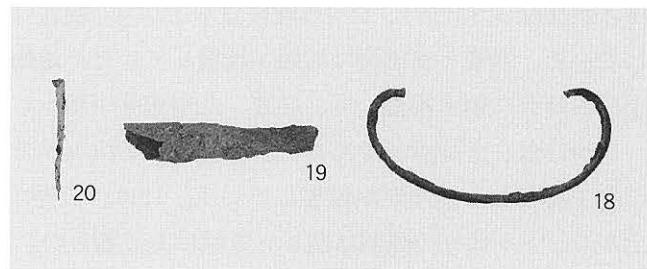


Fig.21 25号土壌出土遺物 (縮尺不同)

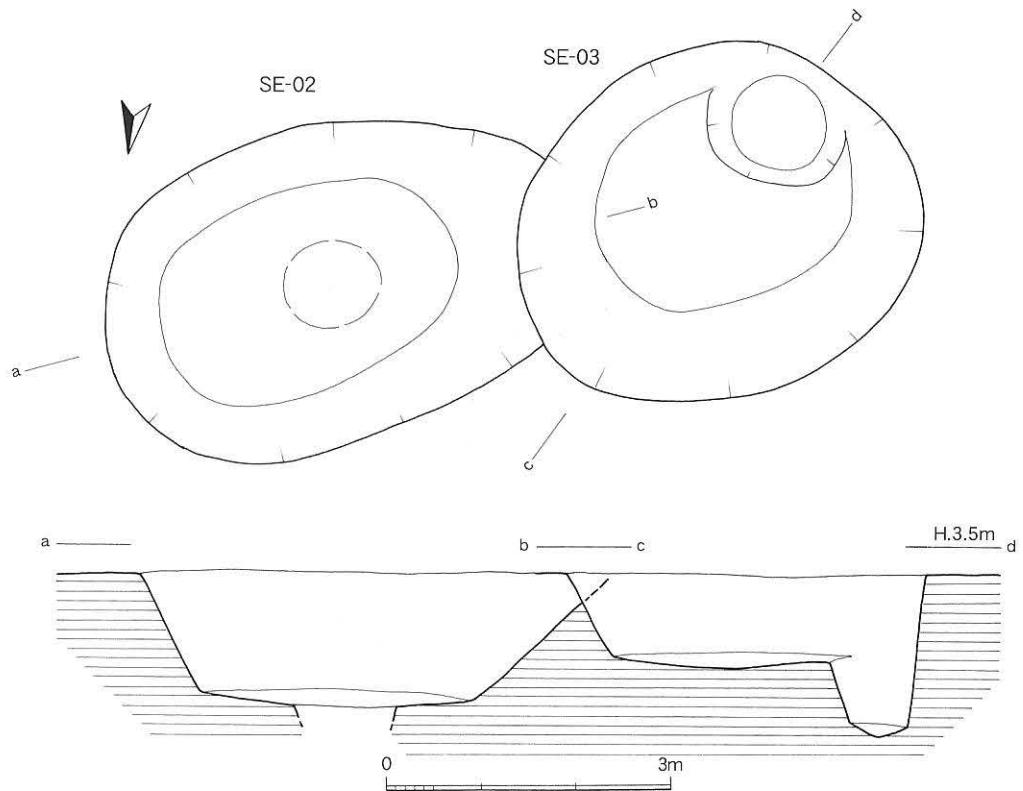


Fig.22 2・3号井戸跡実測図 (1/80)

込に片切彫りの花文を描く。24は口径が11cm、器高が2cmを測る同安窯II類の青磁皿。見込にはヘラによる片彫りと柳描文を描き、底部は釉剥ぎ。25は高台径が8cmの色絵染付皿。畳付は釉剥ぎ。コバルトブルー地に赤・緑・金で上描き施文。26は口径が22.4cmの滑石製石鍋。鍔はやや外傾し、口縁部は鍔から垂直に立ち上がる。器面は粗砥後に丁寧な研磨仕上げ。

3号井戸 SE-03 (Fig. 22・23)

調査区の南隅にある素掘りの井戸跡。堀方は短辺が305cmで長辺は400cmになる大型。井戸の中央に直径が85cmほどの井側があるが、2mほど掘り下げるても井側本体は未検出である。

27は龍泉窯系I類の青磁碗で、見込に「金玉満堂」のスタンプがあり、高台内底部は露胎。28は龍泉窯系II類の青白磁碗で、高台径は5.2cm。外面には鎬連弁文、見込には蓮花折枝文を描き、高台は無釉。29は底径が4cmを測る明染付の青花皿。見込に擬人化した「字」を描き、底部は露胎。30は筒状の土錐である。

4. 第3面の調査

第3面では、堅穴住居跡2棟と土壙1基のほかに複数の柱穴を検出した。しかし、古砂丘面の大半が廃棄壙で大きく削平されていることを勘案すると、本来的にはもっと多くの遺構が拡がっていたものと推測される。

1) 堅穴住居跡

堅穴住居跡は基盤層の古砂丘上で2棟を検出したが、古砂丘面が後世の廃棄壙で大きく削平されていることを勘案すると、本来的には幾棟かの住居跡があったものと考えられる。このことは周辺の調査成果からも窺える。

15号住居跡 SC-15 (Fig. 24~27)

調査区の東部に残された古砂丘上に16号住居跡と重複してあり、東壁は16号住居跡の南壁を切っている。西壁と北壁は廃棄壙の削平を受けて消失しているために全容は明らかでないが、東壁が330cm、

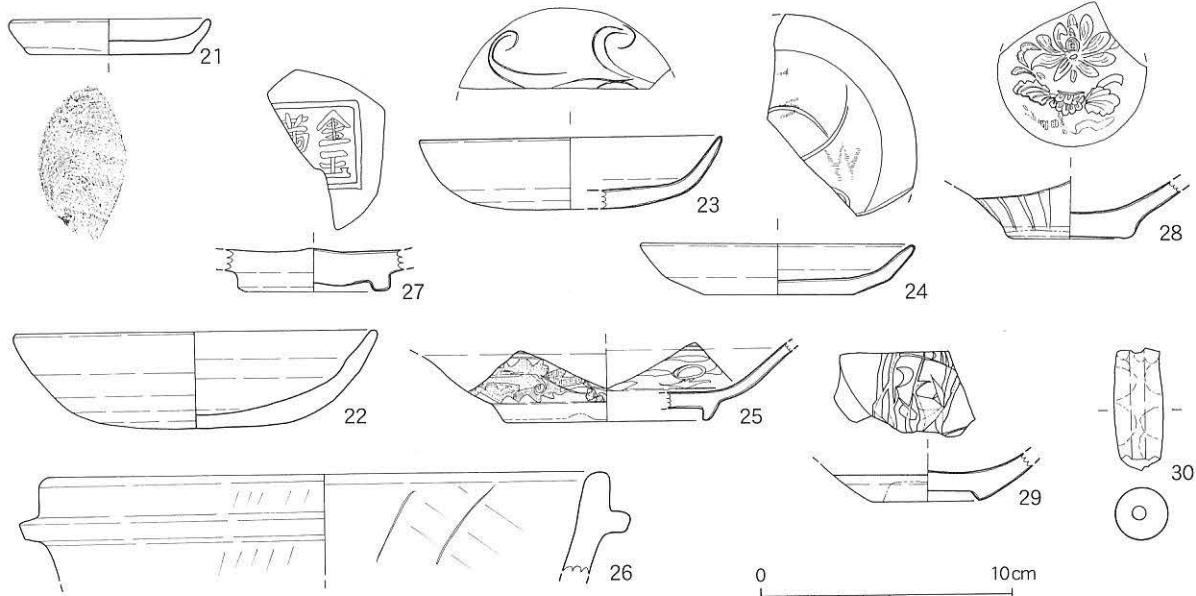


Fig.23 2・3号井戸跡出土遺物実測図 (1/3)

南壁が350cmの長さで遺存しており、一辺が500cmほどの方形プランになろう。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壁高は20cmを測る。断面形は緩やかな逆台形をなす。床面は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、暗茶褐色砂の単一層で、土師器高坏や小型丸底壺片がわずかに出土した。

31は、小型丸底壺の頸部で、口径は8.9cm。口縁部はストレートに外反し、胴部との境には細い横凹線が巡る。調整が丁寧なナデ仕上げで、内面にはヘラ先状工具による暗文が縦方向に施文されている。胎土は精良で色調は明橙色。

16号住居跡 SC-16 (Fig. 24~26)

調査区の東部に15号住居跡と重複して位置し、15号住居跡よりも古い。西壁のごく一部を除いて大半が15号住居跡と廃棄壙によって大きく削平されているために全容は明らかでない。覆土は濃い暗茶褐色砂で、覆土中からは高坏や甕片がわずかに出土した。

32は、土師器の器台脚部である。脚は朝顔状に大きく外反する。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ。胎土は精緻で、微細砂と雲母微細を含み、焼成は良好。外面は淡赤褐色、内面は淡赤褐色～赤橙色。33は、口径が15.8cmの土師器甕である。口縁部は長くストレートに外反し、胴部との境には三角凸帯が巡る。口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリ。胎土は精良で、微細～小砂粒と雲母微細を含む。淡赤橙色。

2) 土 壤

第3面の遺構面は狭小で、検出した土壙は1基に過ぎない。一方で、南東隅には平面的にピットよりも大きい土壙状のものがあり、更に数基の土壙があった可能性が考えられる。

21号土壙 SK-21

(Fig. 28・29)

調査区東部の16号住居跡の埋土上に掘り込まれた土壙で、住居跡よりも新しい。プラン的には廃棄壙の削平もあって明らかでないが、2m余の不整な円形に復原されよう。覆土は黒茶褐色砂で、この砂土が16号住居跡の暗茶褐色砂土上に不整形な範囲に拡がっていた。この黒茶褐色砂中からは数体分の馬の歯骨や四肢骨が出土しており、馬の埋葬壙の可能性も考えられる。

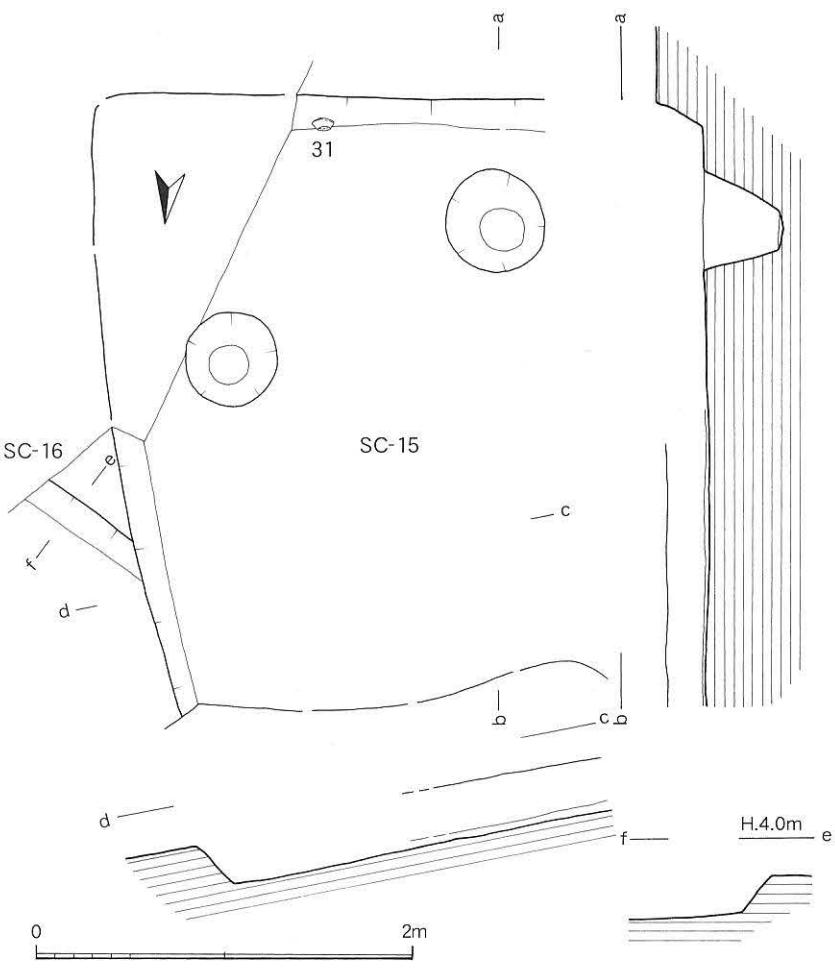


Fig.24 15・16号住居跡実測図 (1/40)

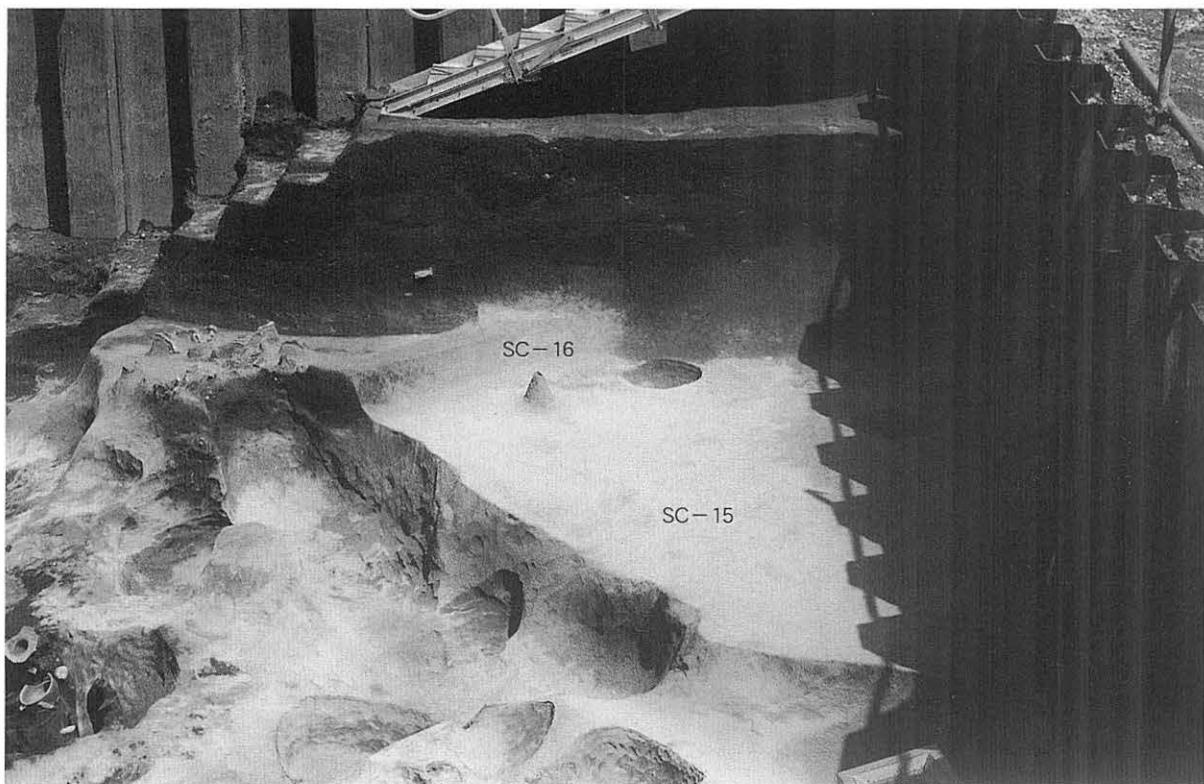


Fig.25 15・16号住居跡全景（西より）

3) その他の遺構出土の遺物 (S P) (Fig.30・31)

調査区からは不整形な土壙と多数の柱穴が検出され、覆土中からは土師器坏や小皿が出土した。殊に柱穴は、本来的には古砂丘上に多くあったと考えられるが、廃棄壙による削平で多くは失われ、建物跡としてはまとまらなかった。

34は、SP-06出土の土師器小皿。口径は7.8cm、器高は1.5cm。体部は糸切りの底部から短くストレートに立ち上がる。体部はヨコナデ、内底面は押圧ナデ調整。胎土は良質で、微細砂と雲母粒を含む。淡黄色。35は、SP-11出土の土師器坏。口径は、12.2cm、底径8.6cm、器高は2.5cm。体部は内彎して立ち上がり、底部は糸切り。油煙が付着している。小～中砂粒を含み、淡黄橙色。36は、口径が12.2cm、器高が2.6cmの土師器坏。体部はストレートに外反し、糸切りの底部には板目圧痕が残る。SP-13出土。37は、SP-23出土の土師器坏。口径は12cm、底径は7.8cm、器高は2.7cm。体部は内彎気味に立ち上がり、底部は回転糸切り。胎土には細砂粒と雲母微細を含み、色調は淡茶色。

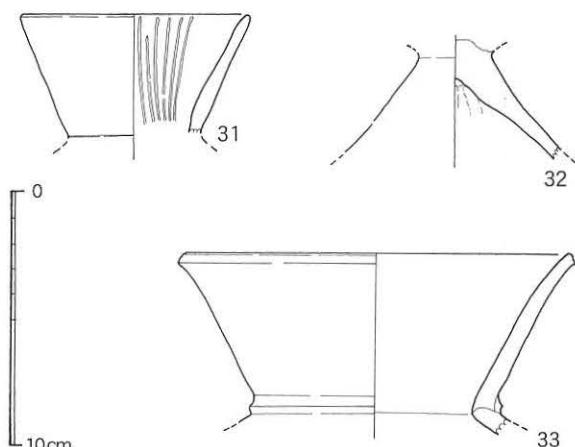


Fig.26 15・16号住居跡出土遺物実測図 (1/3)



Fig.27 15号住居跡出土遺物（縮尺不同）



Fig.28 21号土壙全景（北より）

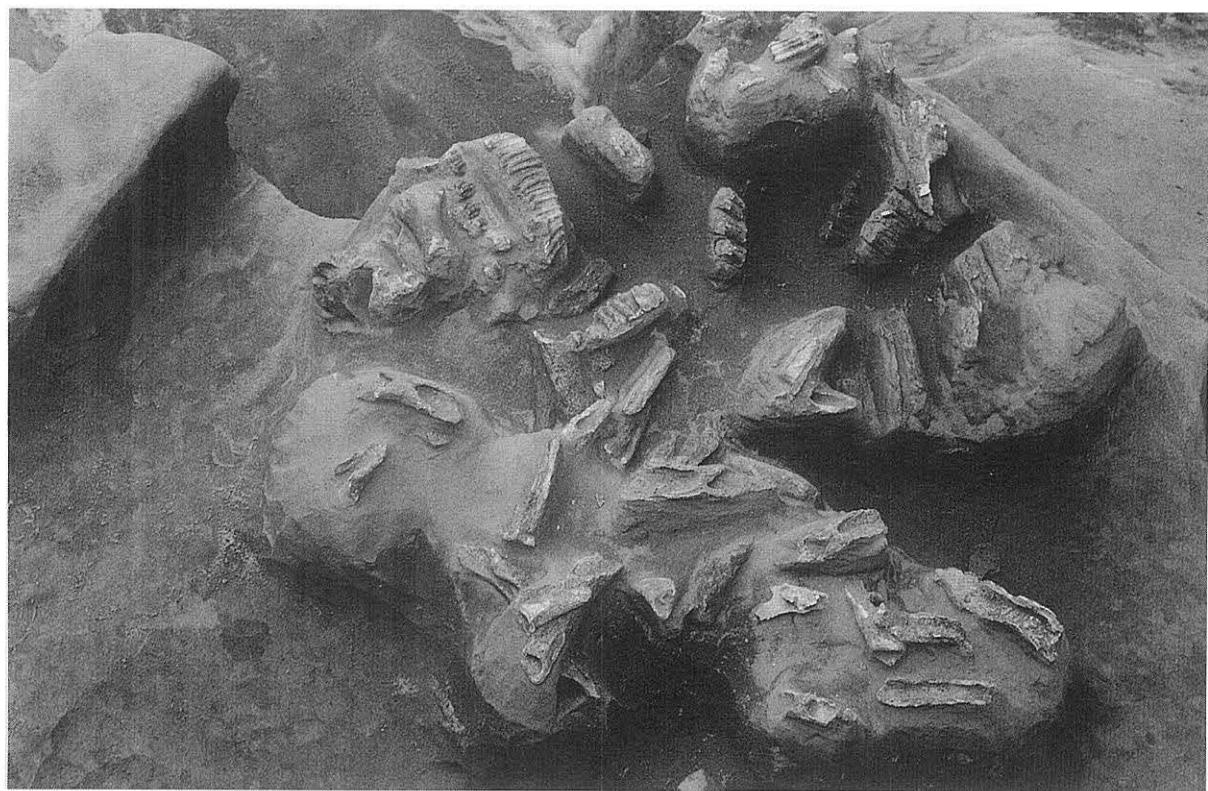


Fig.29 21号土壙獸骨出土状況（東より）

5. 包含層出土の遺物 (Fig.32~41)

包含層出土の遺物は、第1面の遺構検出面上を包含層、基盤層の黄白色砂層までの整地層を上下2層に分層して取り上げた。また、東側の大きな搅乱層は整地層と区分して取り扱った。

36~46は銅錢である。3号井戸跡と4号土壙出土の2点を除いて、20点が包含層や整地層から出土した。38は開元通寶。39と45は元豊通寶。40は皇宋通寶。41は熙寧通寶。42は元符通寶。46が紹聖元寶でこの8点が輸入銭のほかは寛永通寶である。

49~126は包含層から出土した。

49~74は土師器小皿で、口径が6.3~7.2cmのもの(49・50・54・55)と7.6~8.6cmのもの(56~74)のものに大別され、口縁部はやや内彎気味に短く立ち上がる。75~80は土師器壊。75は口径が10cm、器高は2.2cmで口縁部はストレートに外反する。76~80は口縁部がやや内彎気味に立ち上がり、口径は12.1~13cmである。調整は体部がヨコナデ、内底面はナデで外面は糸切り。76は糸切り後に板目圧痕。81・82は土師質の灯明皿である。

83・84は鉄釉陶器小皿。口径は83が8.2cm、84は8.6cm。いずれも内面に油煙の付着痕があり、灯明皿に転用している。88は直径が4.8cm、厚さが1cmのハマでハリ痕がある。85は口径が12.2cm、器高が3.5cmの青緑釉陶器皿。見込に蛇の目の釉剥ぎ痕が、三日月高台内にはスタンプ痕がある。18世紀代の産。86は口径が11cmの陶器壺で、肩部には薄板状の把手が付く。87は口径が35.2cm、器高が15cmを測る玉緑口縁の深鉢。外面は鉄漿状の赤褐色、内面は灰ベージュの半透明釉を施釉している。89は直径が7.8cmの焼塩壺の蓋。18世紀代の産。90~92は土鈴で、最大幅が3.7cmの小型のものと5.8~

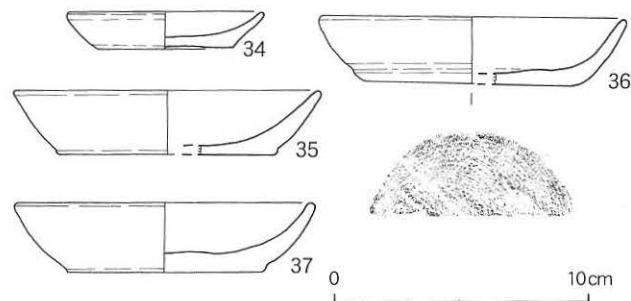


Fig.30 ピット出土遺物実測図 (1/3)

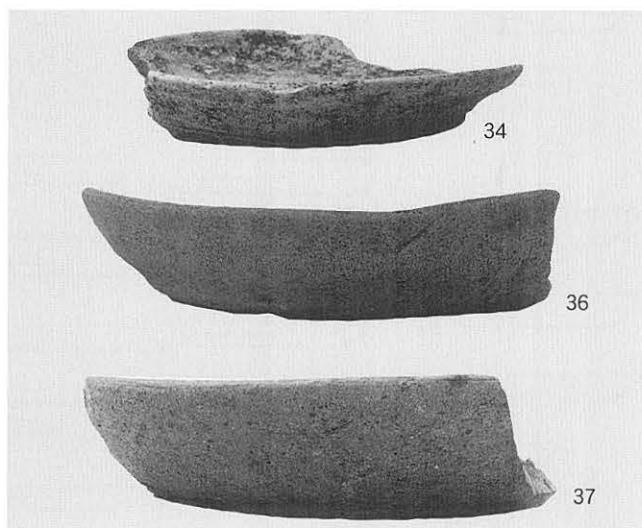


Fig.31 ピット出土遺物 (縮尺不同)

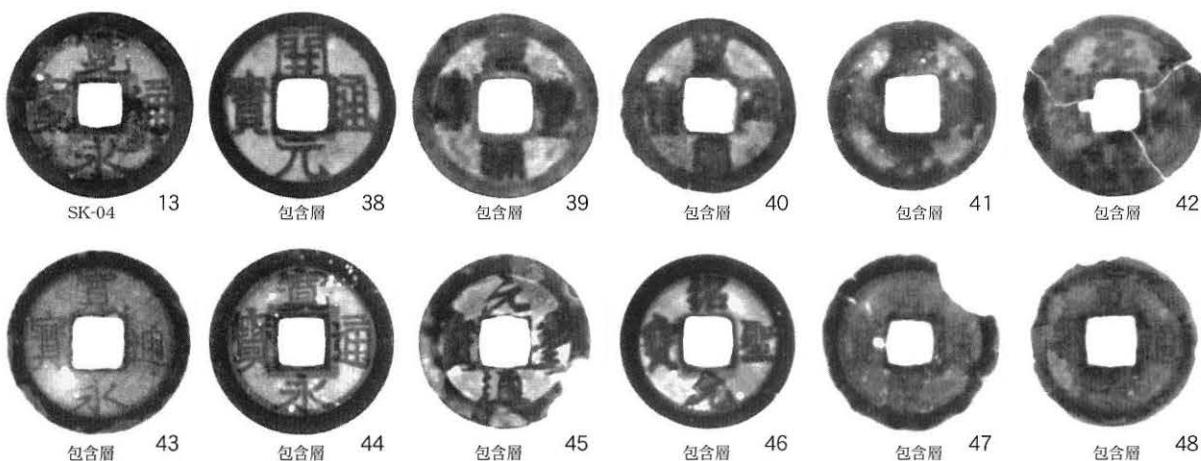


Fig.32 出土銅錢 (縮尺不同)

6.2cmの大型のものがある。93・94はラグビーボール状の土錘。

95は長さが4.7cm、幅が3.7cm、厚さが2.7cmの滑石製有溝石錘である。96は型押し成形のミニチュア人形。97は口径が11cm、器高が2cmの龍泉窯青磁皿。底部は釉剥ぎ。98は同安窯の白磁碗。口径は14.6cm、器高は4.3cm。99は口剥ぎの同安窯I類の白磁皿。口径は10.4cm、器高は2.6cm。底部は釉剥ぎで見込に圈線と櫛描文を施文する。100は白磁の輪花皿で、口径12.6cm、器高は2.7cm。豊付から底部は無釉。101~105・107~117は肥前磁器である。101~103は貝文を模した型押成形の白磁紅皿。

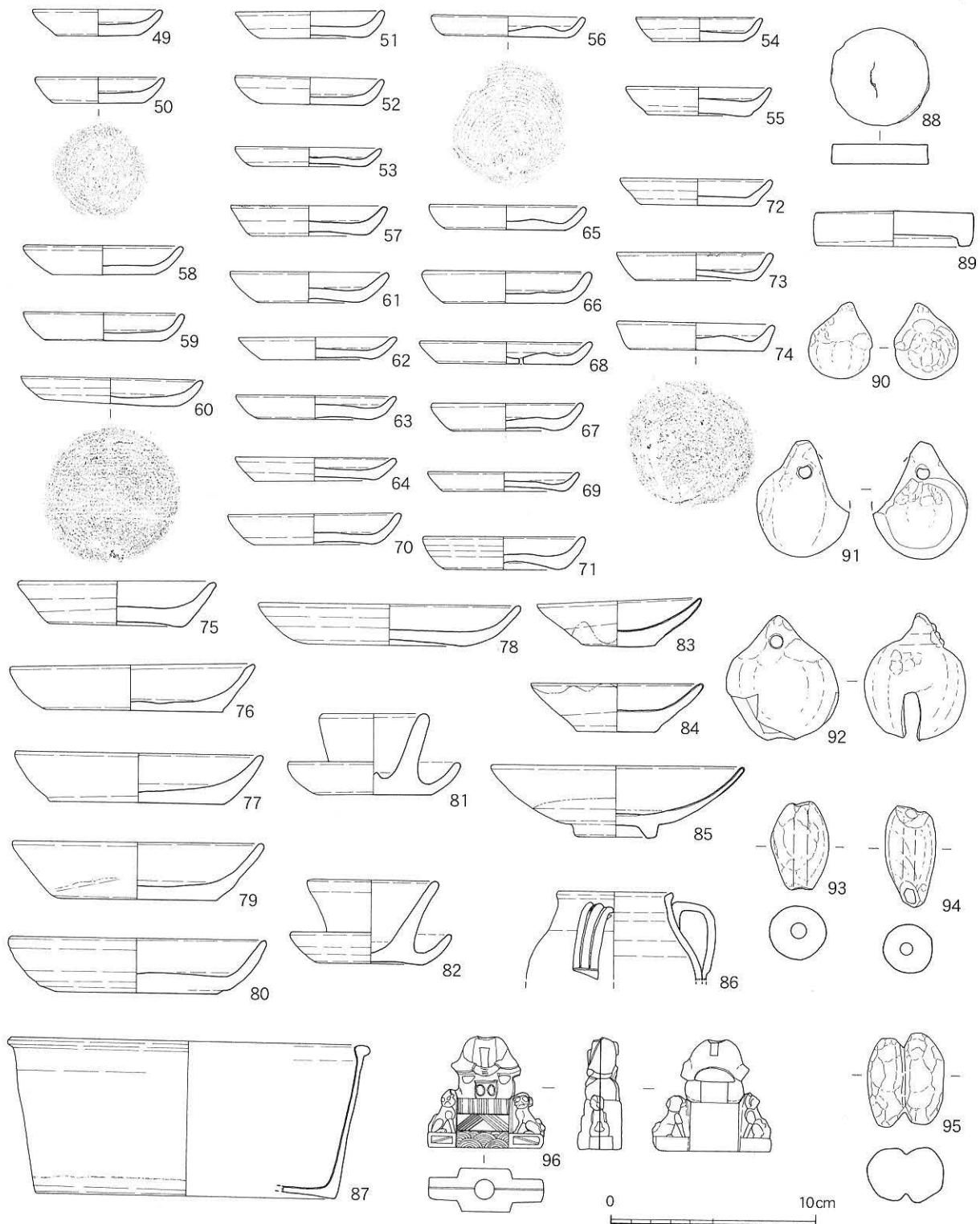


Fig.33 包含層出土遺物実測図 1 (1/3)

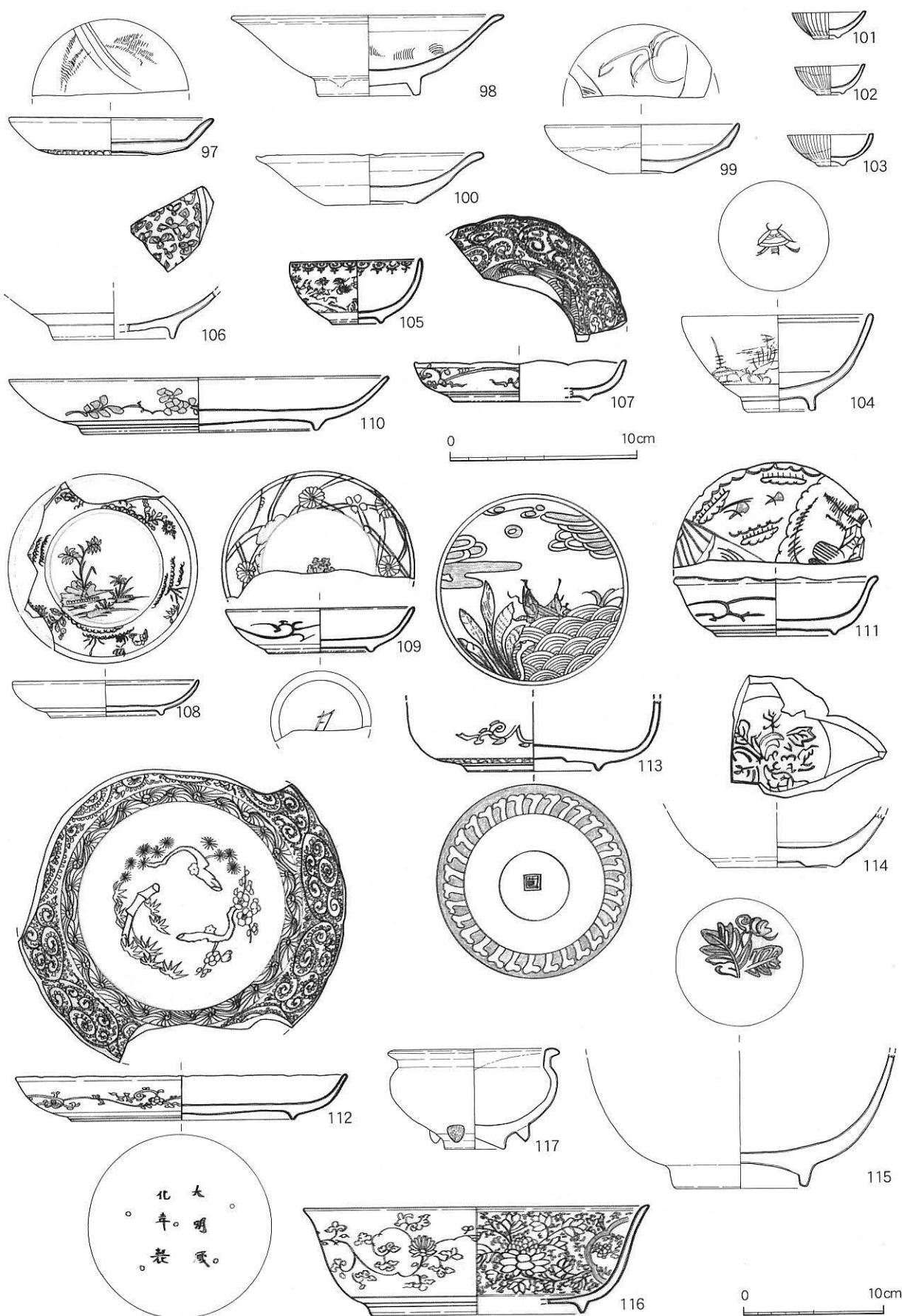


Fig.34 包含層出土遺物実測図 2 (1/3 · 1/4)

口径は3.8～4.6cm。17～18世紀。104は磁器碗で、口径は10.2cm。見込に昆虫文、外面に山水文を描く。1770～1790年の産。105は染付盃で、口径7cm、器高は3.4cm。18世紀。106は明染付の青花皿で畠付は釉剥ぎ。107は口径が13.6cmの輪花染付皿。見込には蛸唐草文を描く。1680～1700年の産。108は口径が13.4cmの色絵草花文皿で、赤・青・薄緑色で施文。畠付は無釉で、高台内にハリ支え痕がある。17世紀末。109は波佐見窯の皿で、見込には五弁花のコンニャク印判と菊格子文を、外面には唐草文を施文する。畠付は無釉で目砂が付着している。1690～1780年代。110は口径が20.4cmの柿右衛門窯の大皿。見込に草花文、外面には唐草文を描き、高台内にはハリ支え痕がある。1690～1780年代。111は口径が14.6cmの輪花鉢。見込の山水文を描く。18世紀代の産。112は口径が23.8cm、器高が3.2cmの染付輪花文の大皿。見込には蛸唐草文と松竹梅文を描く。高台内には「大明成化年製」銘と6ヶ所のハリ支え痕がある。17世紀後半。113は有田筒江窯の青磁鉢。見込に荒磯文、高台内に「筒江」銘がある。18世紀後半。114は18世紀の大の青磁鉢。見込にはヘラ彫りの木の葉文を配し、釉剥ぎの高台には鉄錆を塗布する。115は有田山辺窯の大鉢。見込にはヘラ彫りの枝折文を施文する。1650～1670年代の産。116は有田窯の染付窓絵唐草文の鉢。口径は24.8cm、器高は7.7cm。1740～1770年代。117は口径が13.2cmの三脚香炉。18世紀代。118は砂岩質の石臼である。119は直径が30cm、厚さは6.5cmで摺り目は6区画に分割。120は裏面の中央に径が2cm、深さが1.7cmの軸受け孔がある。

127～135は整地層上層から出土。127～134は土師器小皿。口径が6.6～7cmのもの(127・128)と7.7cm～10cmのもの(129～134)がある。底部は131と134が板目圧痕。132と133が糸切り後に板目痕。口縁部は短く内巻気味に立ち上がる。135は口径が15cm、底径11.8cm、器高が2.6cmの土師器坏である。口縁部はストレートに外反し、底部は糸切り後に板目圧痕。

136～153は整地層下層より出土。

136は口径が8.2cm、器高が1.3cmの土師器小皿。137・138は土師器坏である。137は口径が11.4cm、

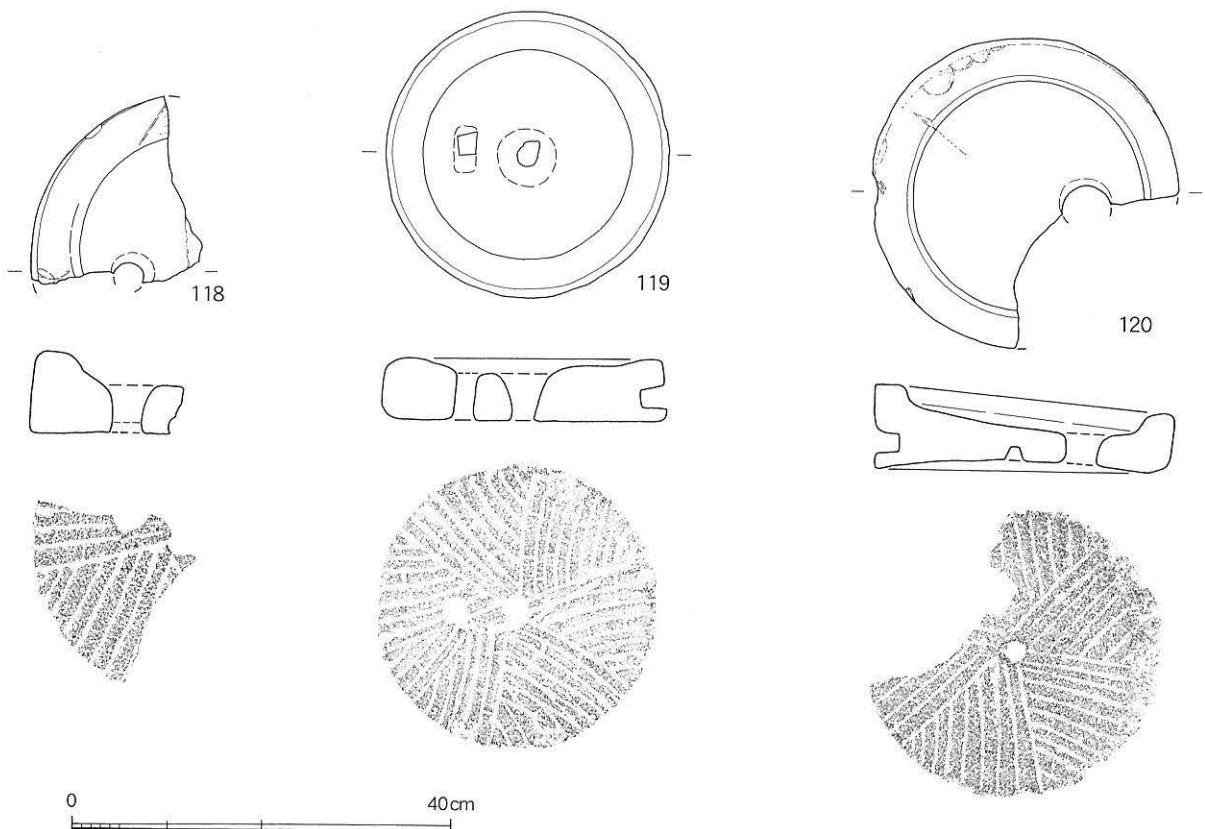


Fig.35 包含層出土遺物実測図3 (1/8)



Fig.36 包含層出土遺物 1 (縮尺不同)

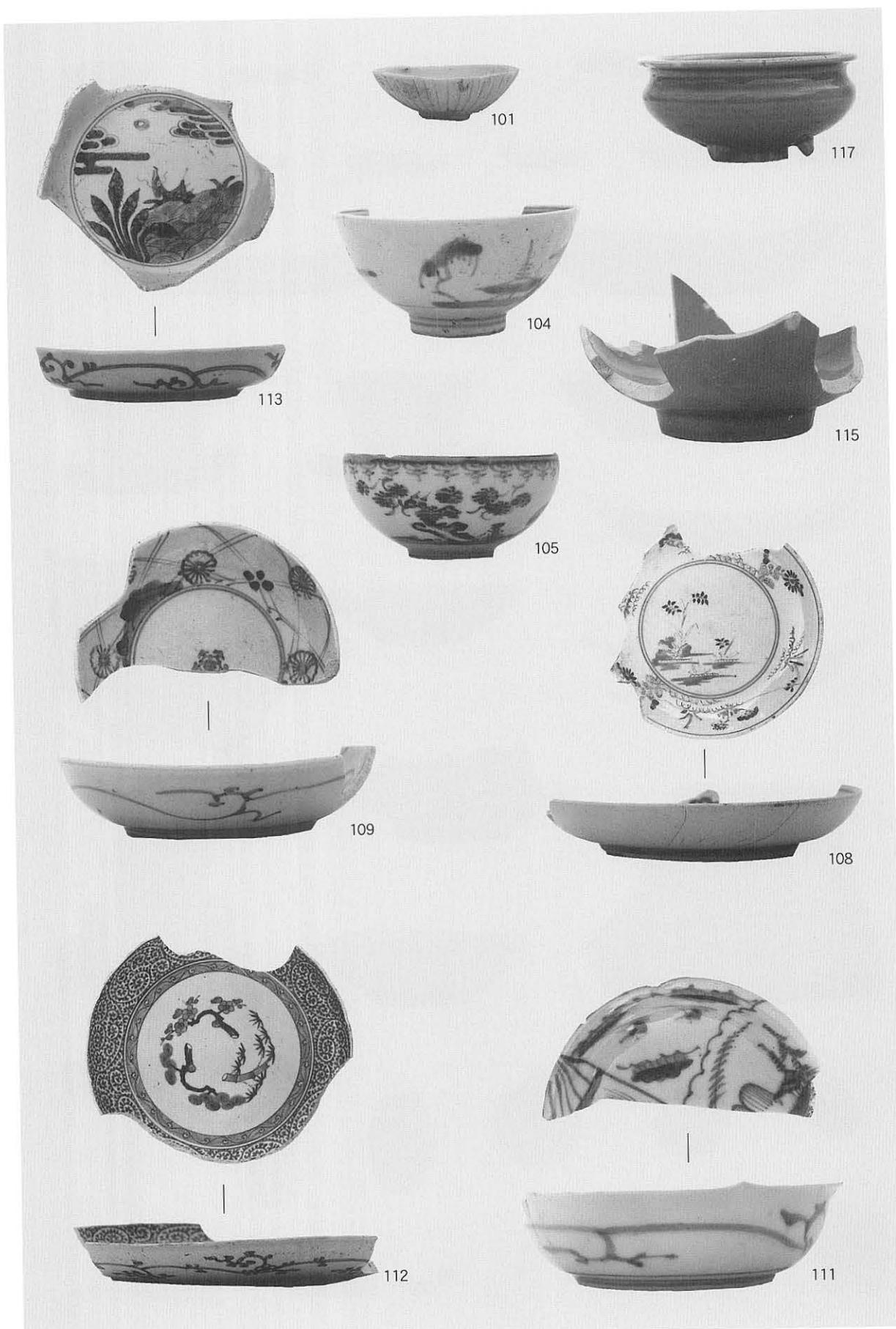


Fig.37 包含層出土遺物 2 (縮尺不同)

器高は2.9cm。138は口径が12cm、器高は2.7cm。体部はヨコナデ、内底面はナデで底部は糸切り。胎土には雲母微細と小砂粒を含み、焼成は良好。色調は、淡黄～明黄橙色。139は口径が11.4cm、器高が3.3cmの土師器碗である。体部は偏球形をなし、外面は粗い研磨状のヨコナデ。胎土は精良で、焼成は堅緻。色調は内面が赤橙色、外面は暗赤橙色。140は口径が15.6cmの土師器甕である。ストレートに外反する口縁部は内唇を小さく摘み出す。外面はタタキ目、内面はヘラケズリ。胎土には微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は堅緻。

141は高台径が5.8cmの青磁碗で、兜巾高台内には「二号」の墨書がある。見込には蛇の目の釉剥ぎで灰オリーブ色の釉薬を施釉している。

142は高台径が4.7cmの青磁碗。見込に「河濱遺範」のスタンプがある。畳付と底部は無釉。龍泉窯系。143は同安窯系II類の青磁碗。底部に「夏房」の墨書がある。144は高台径が5.2cmの青白磁碗。ピンホールや釉溜まりが多く、外底面に「鄭石」の墨書がある。145は口径が9cm、器高が2.2cmの龍泉窯系I類の青磁皿。外底部のみ無釉。146は同安窯系I類の青磁皿。見込には櫛描きとヘラ描きで施文。147は口径が11.2cm、底径が3.6cm、器高が2.5cmの白磁皿である。IV-1類。148は高台径が7.6cmの白磁碗。淡黄白色の胎土に白っぽい透明釉を雜に施釉している。底部に「而」と判読可能な墨書がある。149は口剥げの白磁小鉢で、口径は11cm、器高は4.3cm。150は明染付の青花皿で、高台径は8.4cm。見込には花文を描き、畠付は露胎。152は高台径が8cmの高麗青磁壺である。灰色の精緻な胎土に不透明な灰オリーブ色の釉薬を施釉する。151は細い土錐である。長さは4.8cm、厚さは9mm。153は砂岩質の石玉。

154～171は東側の攪乱壙より出土した。

154～163は土師器小皿。口径が6.8cm～7.4cmのもの（154・156・158・163）と7.6cm～8cmのもの（155・157・160～162）のものがある。口縁部は157と159～161がストレートに外反するほかは内彎気味に立ち上がる。底部は糸切り。164は瓶の把手である。

170・171は鞴の羽口で、筒径は170は8.3cm、171は9.5～9.8cm。孔径は170が2.6cm。171は3.5cmを測る。筒口に溶融し鉄滓が融着している。165はIV-2類の白磁皿である。口径は10.4cm、底径は4cm、器高は2.2cm。外底面は釉剥ぎ。166はIV-2類の玉縁口縁の白磁碗である。口径は16cm、器高は6.2cmで、高台径は7cmを測る。外面は半釉で、見込には1条の圈線を描く。167は口径が12cmの

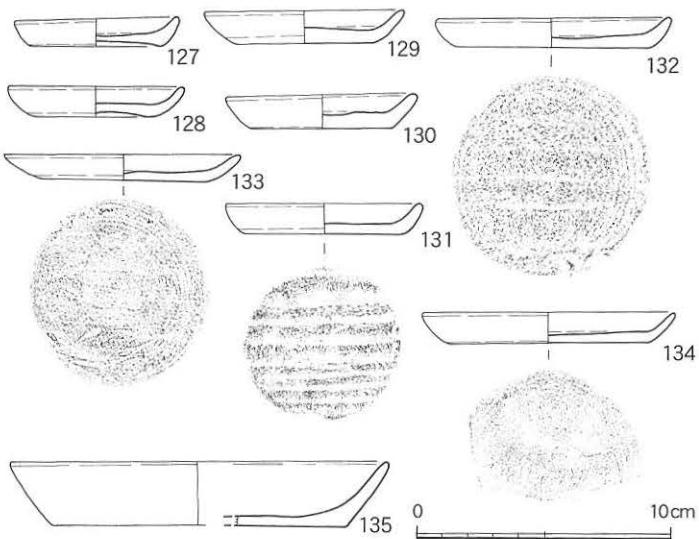


Fig.38 整地層上層出土遺物実測図 (1/3)

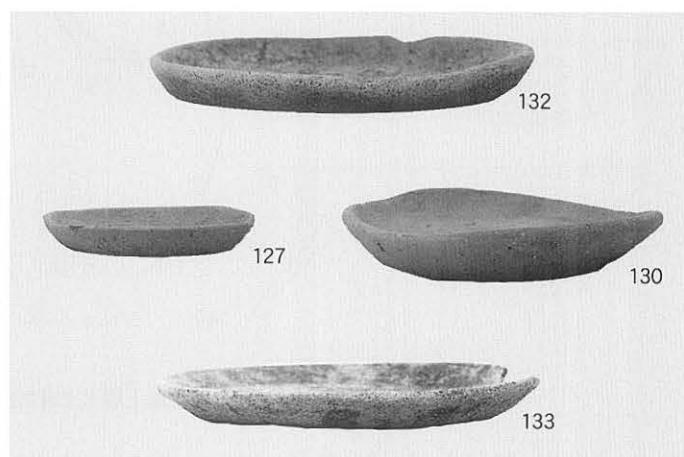


Fig.39 整地層上層出土遺物 (縮尺不同)

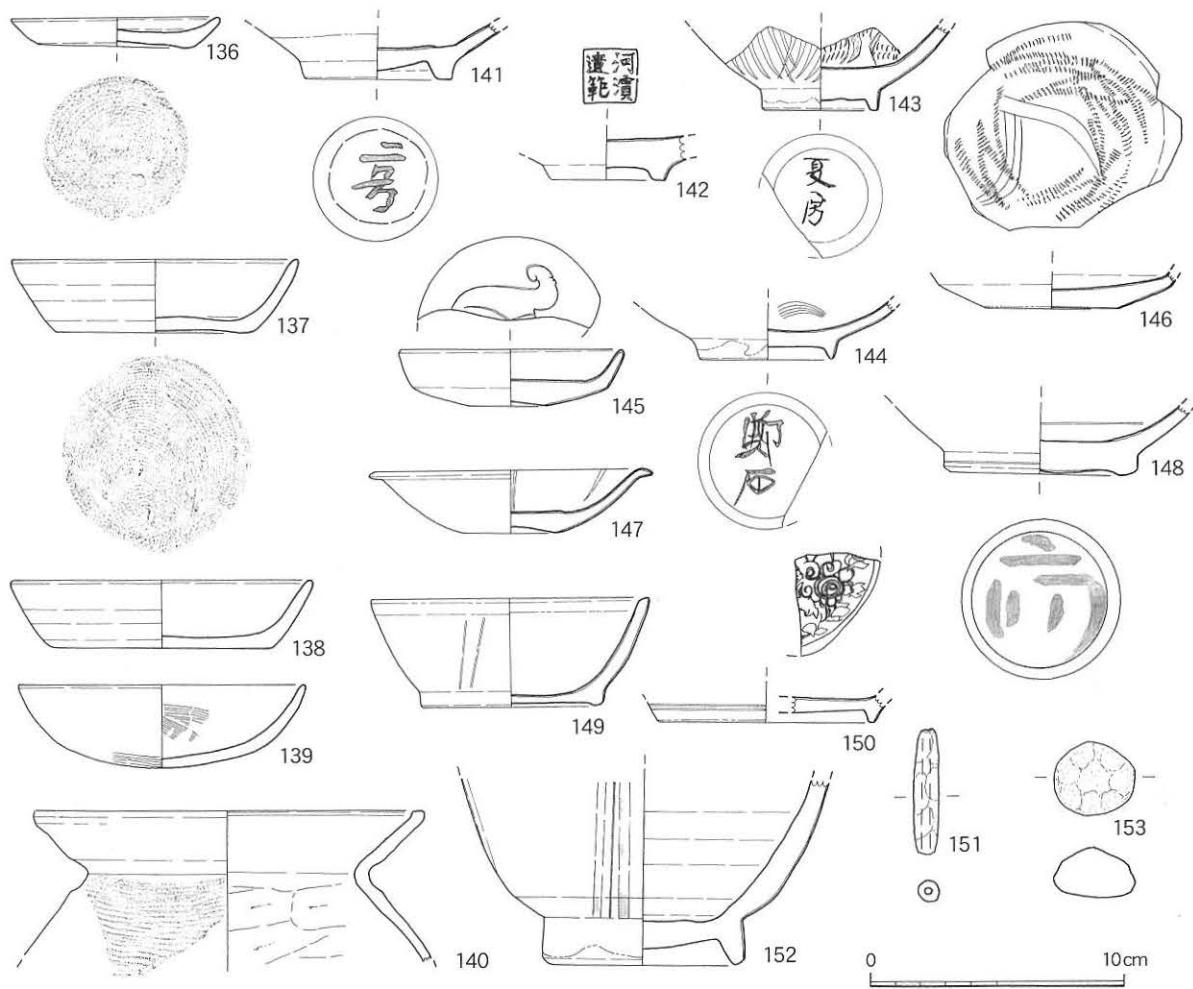


Fig.40 整地層下層出土遺物実測図 (1/3)

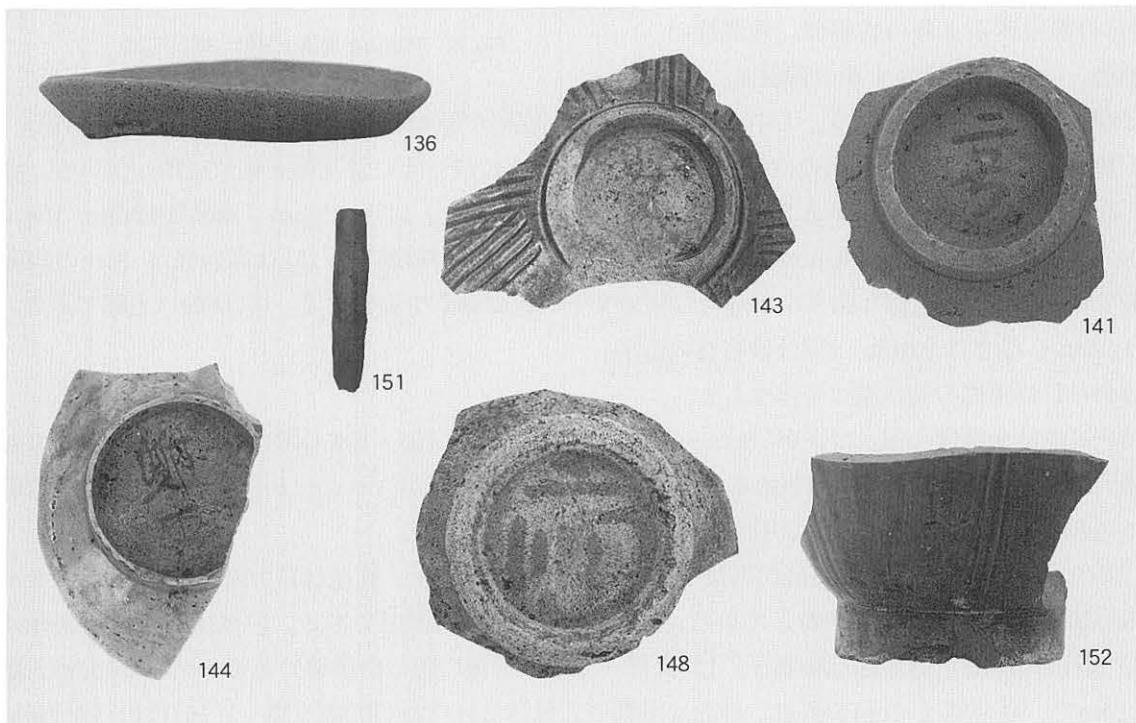


Fig.41 整地層下層出土遺物 (縮尺不同)

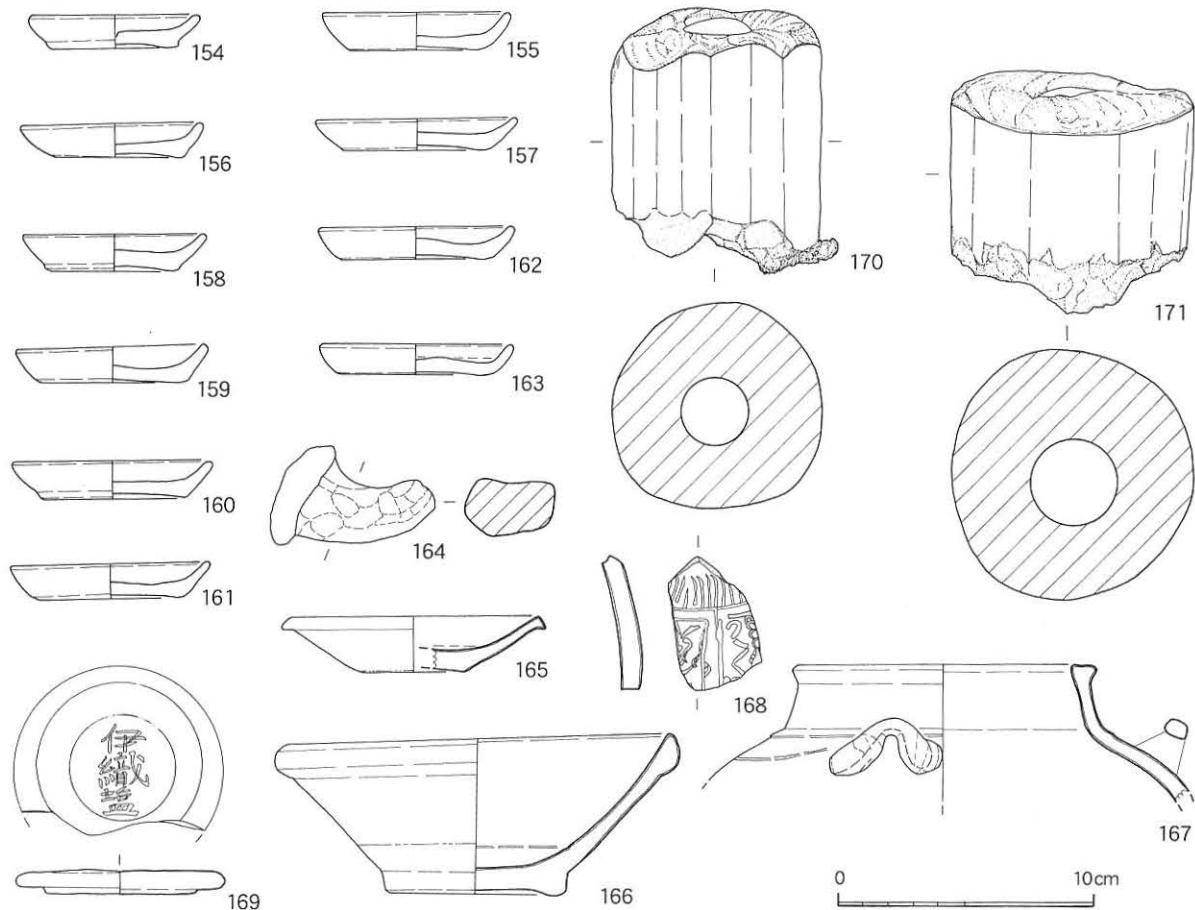


Fig.42 東側攪乱塙出土遺物実測図 (1/3)

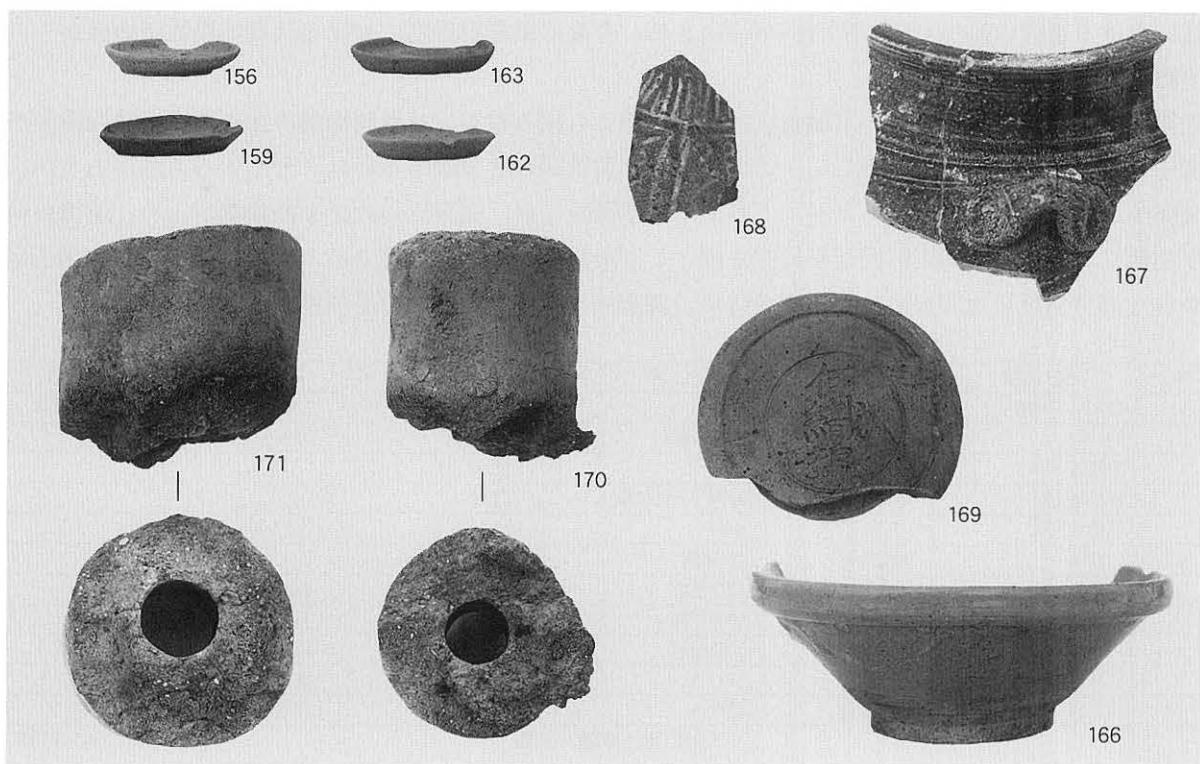


Fig.43 東側攪乱塙出土遺物 (縮尺不同)

黄褐釉四耳壺である。口縁部には重ね焼きの目砂が付着している。灰色の胎土にオリーブ色の釉薬を施釉している。168は李氏朝鮮の粉青砂の象嵌壺である。白い化粧土に象嵌して透明釉を釉掛けしている。169は径が8.2cmの焼塩壺の蓋で、上面に「伊織塩」の刻印がある。

III. おわりに

第170次調査では、古墳時代初めから中世を経て近世までの遺構と遺物を検出した。その成果については、時間的制約と準備不足から十分に検討できなかった。なかでも年度末の混乱の中で記録メモの一部が散逸し、報告書の作成に支障を来たした。調査担当者としては、その責を全うしたとは言い難く、ここでは反省点を込めて幾つかの問題点を簡単に整理し今後の課題としたい。

本調査では、古墳時代初めと古代末から中世および近世までの3面の遺構を検出した。時期的には第1面とした近世の遺構面は、現代の客土層によってほとんどが削平されて埋甕の底部を残して消失しているが、廃棄壙や搅乱壙からは肥前の染付や色絵磁器などが出土している。廃棄壙中の整地層には幾層かの遺構面が部分的に観察されたが、明確な面としては捉えられなかった。第2面は、古代末から中世の遺構面である。第3面は、古墳時代初めの遺構面で、竪穴住居跡を検出した。この第3面の遺構は、古砂丘の基盤層上に掘り込まれており、祇園町周辺を頂部とする博多濱の古墳時代初めの集落域の拡がりを示している。この第3面上には茶褐色砂土の薄い堆積層からは遺物も出土しているが、古墳時代中期から古代の遺構は検出されなかった。古墳時代初めや12~13世紀代の遺構と比べて特徴的である。一方で、第2面と第3面の遺構面は、調査区東南部のわずかな範囲にしか残っておらず、調査区内での拡がりは明らかでない。本調査区の東にある第172次調査区や南の第173次調査区でも同様の報告がなされている。また、第2面の遺構面は、大半が廃棄壙と搅乱壙に削平され、層位的な調査は不可能で2面の遺構面を同じレベルで調査に終始した。そのため面的な調査に支障が生じたのも事実である。このように第170次調査区では、周辺域の調査成果と合わせて「博多濱」の頂部域における遺構の拡がりを示す資料が検出され、今後は祇園町界隈における該期の集落域の拡がりの再検討が望まれる。

最後に、本調査のような狭小な調査区では、幾層にも積み重ねられた整地層の調査では多量の排土が発生し、仮置き場の確保が難しい。この解決には調査区の2分割あるいは3分割する方法があるが、反面多くの時間を要するディメリットがある。本調査では、調査区の大半を廃棄壙が占め、遺構の検出が難しかったため調査区西端を仮置き場として最後に調査する予定であったが、結果的に時間不足から一部を割愛した調査にならざるを得ず、調査法に何らかの工夫の必要性を痛感した。

No.	出土遺構	銭 銘	備 考	No.	出土遺構	銭 銘	備 考
1	SE-03 井側内	□×××	1/4		包含層	□□□×	3/4腐食著しい
13	SK-04	寛永通宝	1625年鑄	43	包含層	寛永通宝	1625年鑄
	整地層下層	銅錢	細片		包含層	□□□□	
	整地層上層	開元通寶	腐食著しい621年鑄		包含層	□□□□	
	整地層上層	□□□□	小型		包含層	□□□×	3/4
38	包含層	開元通寶	621年鑄		包含層	□×××	1/4×2
39	包含層	元豐通寶	1078年鑄	44	包含層	寛永通宝	1625年鑄
40	包含層	皇宋通寶	1039年鑄	45	包含層	元豐通寶	1078年鑄
41	包含層	熙寧元寶	1068年鑄	46	包含層	紹聖元寶	1094年鑄
	包含層	×××寶	1/4	47	包含層	寛永通宝	1625年鑄
42	包含層	元符通寶	要接合	48	包含層	寛永通宝	1625年鑄

Tab1. 出土銅錢一覧表

□は判読不能、×は文字欠損

報 告 書 抄 錄

ふりがな	はかた							
書名	博多128							
副書名	博多遺跡群第170次調査報告							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1040集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地			北緯 °、'	東経 °、'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
はかた いせきぐん 博多遺跡群 第170次	ふくおかし はかたく 福岡市博多区 祇園町2丁目	市町村 40130	遺跡番号 0121	33° 35' 35°	130° 24' 48°	20070213 200704	185m ²	ビル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
博多遺跡群 第170次	集落	古墳～中世 近世	住居跡 土壙 井戸跡		土器 陶磁器 鉄製品 銅製品 土製品 銅錢		遺構面 3面	

博 多 128

－博多遺跡群第170次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書1040集

2009年（平成21年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株川島弘文社

